妙な三階建

生氣に乏しきを感ず

敷この調和をとりて、其上に、家が建築してありますから、何となく家に勢ひがありません、斯の如き建築は稀でありまして要するに屋敷の傾斜から斯の如き設計となつたのであります。

從つて乃木家は三階の如き感想が起りまして、第一階は石室の如く又地下室の如く思はれ、第二階が即ち本邸の中樞間となりて、玄關より出入することになります、第三階は通常から言へば二階で石室のある爲めに三階となるも、餘り高い建物ではありません。

斯の如く一種、類の稀な建方でありますから、家自體が何となく異樣に感ぜられ、殊に石垣が一階となりて外に目立つ爲め其家が一層寂しくて、生氣に乏しきを感ずるのであります。

加之乃木家は唯一棟で本宅に附屬する建物がありません恰も孤立の如く思はれて一層寂しい感感を生ずるのであります、馬屋はありますが彼は本宅附屬の建物とは申すことが出來ぬ、本宅附屬の建物は土藏とか納屋、炊事場等を云ふのであります。

本邸は孤立を表象す

人間でも孤立を嫌ふが如く、家も亦孤立を甚だ忌むのであります最も貧賤の人や其分に應じて居る者は運命が孤立せしむるのでありますから之は亦一種の觀察がありますが、乃木大將の如きは位人臣を極めた高位高官の方で、孤立すると云ふが如き境遇の方ではありません、然るに本邸其者が孤立を表象するは家相運命上の見地からは頗る凶相と申さねばならぬ。

大將閣下は先にも述べたるが如く、人に化身した神であります、衣、食、住の如きは先天的に何等の趣味を持つ方ではありません、從つて住宅の如きも寂しきも、賑かなるも頓着なく、唯寒暑を凌ぐに足ると云ふ見地から御住になつたものでありますから、家にも夫

物に相應するを要す

れが表象せられて斯の如く寂しき家となつたのであります。

物に相應すると云ふことは頗る大切な問題でありますが、家相運命上にても又實に重大なる問題でありまして私の實驗上にては方位上の問題と輕重なきまでに注意すべき大切の問題と確信して居ります。

不相應の家に住めば失敗す

相應しない家に住む人は大抵は失敗に終ります、失敗に終らざれば家庭に不祥を生じます、之は事實の經驗から立証することが出來ます、近頃は郊外地に別邸が流行しまして隨分身分不相應の邸宅を建築して二三年ならずして失敗し、賣物に出る家が澤山にあります、之は諸君が事實に就て注意せられたならば思ひ半ばに過ぎるだらうと思ひます。

商家の如きも不相應なる廣告的な然して虛飾な構を爲す人が澤山に出來ましたが是等は必ず失敗に終るもので、一見之を外觀より察するも明かに之を斷言し得るのであります。

此事實は更に實例する機會がありますから之に讓りまして、私の見地からは乃木大將の邸宅は大將に頗る不相應な邸宅だと觀察しました、殊に孤立の表象の如きは最も凶相でありまして大將の御身の斯くならざるを得ざるを表象するかと懷へば轉た感慨に堪へないのであります。

乃木家は凶相の祟りか

(六) 乃木家は凶宅に祟りしか

斯の如く論じ來るときは、私の見地からは乃木家の絶家したるは家相、地相の凶惡なる爲めにして、所謂其凶相に祟られたりと云ふが如き斷定となるのであります、果して吾人萬物の靈長が、住宅の

果して凶相に祟らさるか

凶相に祟られて、運命を左右せらるゝでありましようか、殊に乃木大將の如く、人にして神なる方が、住宅の凶相の爲めに祟られて絶家したりと云ふが如きは、常識よりは信じ得べからざる說とせねばなりませぬ。

然し若しも住宅の凶相に祟りなく如何なる家に住むも自由なりと言はゞ私の住宅と運命を說く事は根本的に無意識となりて何が爲めに說くかの疑問を生ずるのでありまず、私は此機會に於て此問題に就て一言したいのてあります。

祟るとか祟らぬとか言ふ問題は、之は信仰上の問題でありますから、之を科學的に說明するとの出來ないのは當然であります、即ち祟ると思ふ人は祟ると信じ、祟らぬと思ふ人は祟らぬと信じるので、要するる其人の智力と性情とに於て其信仰を異にするが故に祟る

凶相に凶事多く善相に好事多し

祟らぬの解決は唯其人の信仰に依るより致方がないのであります。

然し之を事實の經驗から綜合立證するときは、凶相の家には凶事多く、善相の家には好事多きと云ふことは明に斷言し得るのであります、換言せば家相、地相に善惡の表象せらるゝが如く其家庭が又其運命に表象せられて住宅と其住む人と運命を同じくするといふことは之を事實の歸着によりて一點も疑ふことを得ぬのであります即ち其住宅を觀れば其家の運命は之を觀察し得るは醫師の病を觀て其病源を知ると異るところは無いのであります。

住宅の凶相が何故に住人を凶惡ならしむるかと云ふ理論の說明は之を感應とか祟りとか云ふより外到底適當の語を示すことは出來ないのであります。

例せば淺草の觀音樣に參詣して御利益を蒙ると云ふことは之を說

信仰問題の眞髓は文章も及ばず

明し得べきも、其御利益が如何にして吾等の身に蒙るかと云ふ問題は之を感應と說明するか靈驗と說明するか以心傳心と說明するかより致方がない如く、無形の信仰問題には倒底文筆は及ないのであります。

文筆は及ばないですが、或點までは之を說明し得ることを堅く信じて居ります、左の二點に依りて說明してみましよう。

(1)乃木大將が絕家表象の家に住みて絕家となりしは先天の運命と斷ずること。

(2)乃木大將が子孫相續の善良の住宅に轉じた時は絕家の悲慘は免れ得たりと感ずること。

絕家は先天の運命

先づ第一の絕家は先天の運命と感ずる塲合は、乃木大將御一家は先天に於て既に國家の爲めに殉死すると云ふ運命を齎して世に生れた方であるから、知らず知らず地相も住宅も亦絕家すべき表象のところを求めて居住せらるゝに至つたのである、即ち凶相に祟つて斯の如き絕家の悲慘となりしにはあらずして、自然に斯くあるべき運命の人が斯くなるべき住宅に居住したので、恰も同氣相求め、同氣相因ると云ふ境遇に一致したと感ずるのであります。

斯の如く感ずるときは乃木大將は凶相に祟られたるにあらずして運命の如く運命の果を求めたと云ふことになるのであります。

之は私か事實に於て屢々感ずるところでありまして、大抵人は自己先天の運命と離れては容易に居宅を求めるものではありません、其証據には成功する人は何等家を研究せずしても成功して居ります又成功せぬ人は如何に家相に齷齪するも成功せずして、十年に五度も六度も轉宅して、徒らに迷境に彷徨ふて居ります、是等は先天の

運命を如何とすることの出來ない人であります。

誠に卑近な例でありますが婦人が三越呉服店などに行きて百反も二百反も彼れ之れと撰擇して、偖て其中で最も優美な品を取るかと云ふに矢張自分の好むところの一反を得るので、人は自巳の趣味と運命とを離れては容易に圏外に出づることの出來ないものであります、從つて内外の運命が一致して善悪ともに同氣相求るが如き結果を生ずるのであります、即ち乃木大將の如きは、先天に絶家すべき因縁ありて絶家すべき居宅に住したと感想せば、凶相に祟りて絶家したとは言ふことが出來ないのであります、即ち運命と境遇に絶家したのであまます。

運命と境遇に絶家す

第二の場合は人は先天の運命、趣味、業務等に依りて其境遇の如き家を求むるものであります　偖之を自己の境遇、趣味、又は運命

人意は運命を左右す

等に任せずして、一の運命上の吉凶禍福の理に依りて、自己の意志に依らず、其運命上の理に依りて之を回轉し得るかと云ふ問題になるのであります。

例せば自己の運命は先天的に好運の者か、將た非運の者か、若し幸運なれば其幸運を助くべき家を求め、若し非運なれば其非運を免るべき家を求めて先天の運命を人意に依りて或は助け或は避くると云ふことが恰も家相が其人の運命を左右するが如き結論となるのであります、換言せば家の吉凶は家が其人の運命を左右するにあらずして、其人の家を撰擇するところに其運命が伴ふのであります。

斯の如く論ずるときは人は家の善悪を撰擇して其運命を回轉し得るやと云ふ問題に歸着するのであります、私は之を回轉し得と確信いたします。

譬喩を以て一言しませう。

極く卑近な例であるが、若し病は醫師でさへあれば直ちに治ると思ふは誤解で、醫師を撰擇して始めて其病を治し得るのであります、若し醫師を誤れば生命をも絶つに至るは事實に經驗する所であります。

一着の洋服を求むるに若し其人に相應せざる者を求めて果して其人の品性を保ち得るでしようか、婦人が其着衣を意匠の如何を問はず、年齢を問はず流行の如何を問はずして果して其美德を全ふし得るでしようか、一匹鯛、其料理を撰擇せずして果して其美味を保ち得るでしようか。

世事一切のことは其撰擇の良否に依りて其活用を異にするものでありまして、其撰擇を誤りしと云ふことゝ、其撰擇に當を得たりと云ふことが、成功と否との岐路でありまして世事一切の苦樂は勿論商業學事目的等は一切此撰擇の如何にあるのであります、

住宅に於けるも亦斯の如くでありまして、住宅の凶相に住めば一家に凶事多く、善相に住めば好事多きと云ふは即ち撰擇自然の結論であります、是を迷信と言ひ崇ると云ふも其撰擇に最善の方法を講ずるは迷信にも崇るにもあらざるは明に斷言し得るのであります。即ち乃木家は其撰擇を誤りし爲めに絶家の悲慘を來したりと云ふ結論となるのであります、

乃木大將は運命を超越した人

私は乃木大將閣下は、運命を超越したる大自覺底の方でありますから、喜憂いづれにも落在せず悠々自適であります、至誠に出でゝ至誠に終り賜ふが故に、元より乃木家としては斯の如き問題を問題とするに足らざるや明かであります、然し吾等日本國民と云ふ上よ

乃木家の絶家は國家の痛事

り言へば若しも大將閣下の子孫が現在に生存せられて、上皇室の爲めに大將の意思を奉じて忠勤せられ、子孫長へに榮へたならば、如何に國家の瑞祥でありましやうか、國民の歡喜も亦盡し得ざるところでありますが、私は其點に於て、乃木家の凶相が如何にも痛恨でありまして感慨に堪へないのであります。

社會の方よ、家相を迷信として排斥する人は排せしめよ、然れども子孫永遠に其家を繼ぎて吾が國家に生存せば其幸福は唯一家の爲めにあらずして、眞に國家の爲めであります、家相の眞髄は實に此點に存するのであります。

私が斯の如く乃木家を論じましたも、要するに乃木家の絶家を國家の爲めに悲しむ餘りでありまして、之を論ずる私の痛苦は到底筆硯に盡し得ぬのであります、三度病床に臥したる點より申すも私の

信仰心なき學者の言に迷ふ勿れ

苦しみしことを察し得らるゝと思ひます。

昨日起きて今日倒る、一家の如きは元より家相の是非を論ずる必要はありますまい、苟も皇室の藩屏となり、國家の柱石となり、國民尊敬の中心となる系統正しき乃木家の如き、岩倉家の如きは唯一家の爲めとしても、如何にせば此系統を永へに相續し得るか子孫繁榮し得かと云ふことを考慮するが當然であります、況んや祖先の爲め國家の爲めに之を研究せざるべからざることは申までもないことであります、私は徒らに家相を迷信など言ふ信仰心なき學者の言に迷はされて、悔を終世に遺すよりも、之を研究して生きて家庭の圓滿に團欒し、死して子孫の繁榮を大寂定中に微笑する其快や獨り個人の快にあらずして、眞に國家と快を同ふする快で、始めて人生に生れ得た目的を貫徹し得たのであります、私が家相と運命を說くの趣

意、又實に是に存ずるのであります。

（七）名に表はれたる運命

乃木家の名に表はれたる運命

乃木家を地、家両相より觀察しましたが更に名に於て如何なる運命か表象されて居るかを瞥見して見ましよふ。

乃木希典大將閣下

希典　歸納　顯　倒反　知

實に良い歸納であります、正韻に呼典之切音憲とあります、玉篇には明也、著也とあり、爾雅釋詁には光也、見也とあり、書泰誓曰く天有顯道厥類惟彰とあり傳に言天有明道其義類惟明とあり又達也とあります孟子曰く而未嘗有顯者來とあります。

歸納としては是程に良いのはない稀れと申してもよろしい程で、

名は其人の運命を語る

殊に孟子の未だ嘗て顯るもの來るあらずとは、實に希典大將の全身心を言い盡して居ります卽ち、大將の如きは世に顯るゝ人でなくて世に顯はれたので、古今世に顯るべからざる至誠の趣きが明かに歸納に表象されて居ります、此歸納によりて古今第一の乃木大將閣下なることを知り得るのであります、大將は命名刹那に於て其人なることを語られて居ります。

文字は三萬もあります、然るに命名は三字か四字で六七字の名は稀であります、三萬の中から此二三字の文字を撰擇すると云ふことは偶然と言へば偶然であるが、之を運命上から觀察すると偶然ではなくして、何等か其間に因緣の纏るものありて、其文字が其人の運命を表象すべく其名を命ぜらるゝと觀察することが出來ます、其証據は事實が証明するから疑ふことは出來ません。

日本の二字に日本の運命は語られて居る

櫻樹と云ふ字は偶然に命ぜられた字か、そうではありません、櫻樹に櫻樹の運命は表はれて居ります、日本と云ふ國名は偶然か偶然ではない、日本の二字に日本の運命は語られて居ります、苟も其名あるものに就て其事實を研究したならば、名が運命を語つて居ると云ふことは寸毫も疑ふべからざるは事實で、例外だもないと申してよろしい。

吾人の名に於けるも斯の如く、呱々の聲を擧げて命名の刹那に、八太郎は八太郎、權兵衛は權兵衛と名命せらるゝや既に、運命の何物かを語つて居るのでありますが、善名を得れば其結果も善く、惡名を得れば其結果の惡いは、因果の理毫も疑ふことは出來ませぬ、名が唯偶然に出て偶然に終ると云ふ人あらば、生も偶然、死も偶然で善惡邪正、道德、至誠、陰陽等を說くも之偶然で社會の秩序は根本

大將の名は軍人に適して居る

より覆ることになります、假令偶然と云ふても事實が偶然でない限り之を如何ともすることが出來ません、名は其人の運命を表象することは疑ふことが出來ぬ。

乃木大將の名は途中に改名せられたか否かは知りませぬが、顯と歸納せらるゝは實に此運命を語り盡して居と申さねばなりません、天に顯道あり惟彰るゝとは、大將の功勳を表彰して實に不可思議であります。

知の倒反も歸納の如く得べからざる文字であります、知は玉篇に識也、覺也とありて其常識の敏なるを表し、左傳昭四年公孫明知叔孫齊とは親和を表したもので、大將の內外に親和なりしを語つて餘りありと申さねばならぬ。

大將の名は誠に軍人に適切して居ります、若し商人なれば名に負

名は其の生日を中心とす

て却て障害を生ずるもので、矢張名と人とは必ず相應せねばなりません。

字劃は乃二、木三、希七、典八で名が十五劃の出世幸福數、合數が二十劃の高名大風數であります、天海の二十劃は凶惡遭難數であります。

大將の御生れは嘉永二年拾壹月拾壹日でありますから名の五行と生年日の五行とを調和すると年が己酉の土性に、日が乙己の火性で希が喉音平聲清三位の土性で、典が舌音上聲清四位の火性であります、名が土火で五行も又土火で、火性土となりて、名と其人とは相生活動して誠に一點の申分がありません。

すべて名は其人の生命月日の五行を中心として、文字の五行と相應せしめて、其人も發達し其名も發達するのであります、現今流行の姓名考の如きは此根本を知らず、唯文字と文字の五行と、乾坤天地等にのみ其人を中心とせないから命名の害は恐るべきと申してよろしい。

乃木勝典大尉

乃木勝典大尉

勝典　歸納　銑　倒反　弔

銑は蘇典之切音跣とあります、說文に銑は金之澤也とあり、爾雅釋器には絕澤謂之銑、其註に金之最有光澤者名銑とあります、勝典大尉が軍人中にあつて、至誠と軍律とを守つて光輝なる一頭地を秡きたる有樣を表象して居るは甚だ面白い、然るに晉語に銑者寒甚しとある、之は良い意義でなく甚だ寂しきを含で居ります說文に一曰鐘兩角謂之銑とあり、即ち有形の鐘となります。

倒反は頗る惡い、弔となります弔はとぶらいとかとぶろふとか喪

中の人を訪ふて哀意を致す言葉で説文に問終也とあり、玉篇に弔生ニ曰ヒ唁ト弔ルヲ死ニ曰フ弔ト とあり、弔は傷也、愍也とあり、急就篇には喪弔悲哀面目腫とあります。

此倒反の表象は頗る悲痛すべきで、大尉が砲煙彈雨、戰場の露となりて、悲哀せらるゝを語つて餘りありと申さねばならぬ、依之觀之、大尉の戰死は家にも、名にも表象せられて天命と明むるより是非はないのであります、他は説くまでもありますまい。

乃木保典中尉

乃木保典中尉 歸納 倒反

保典 編

編者卑眠之切音邊とあります、玉編に識也、連也とあり、字林には以テ繩ヲ次ヲ物ニ曰フ編とあり、あむ、つゝむ、むすぶ等の意味であります。

此歸納は是非いづれにも屬せず普通でありまして識也、連也と云ふ義から言へば善いゝ申さねばなりません、軍人に適した名ではない、寧ろ文學に生活する表象であります。

倒反の倒は之は甚だ悪い表象であります、倒は仆也とありて、たふる、たふす義で時ニ有テ風ヲ旌旗皆偃仆すとか、今日壓倒元白ニ とか、いづれも勝敗を意味して仆るか仆さるゝかと云ふ表象となります、二百三高地に戰死せられたる運命が此倒反に表象せられたりと推想し得ないでもありません、要するに其名は善悪相半ばしたと申すが適當であります。

保典中尉は明治十四年十二月十六日生れでありますから年が辛巳の金性で、生日が甲申の水性であります保が脣音上聲清音第一位にあるから水性で、典が舌音の火性となります、即ち本命が金水で保

典が水火となる、此五行の關係は頗る惡い、火尅金、水尅火となりて融和がありません、身體に障害あるは此表象に依て察することが出來ます

(九) 結論

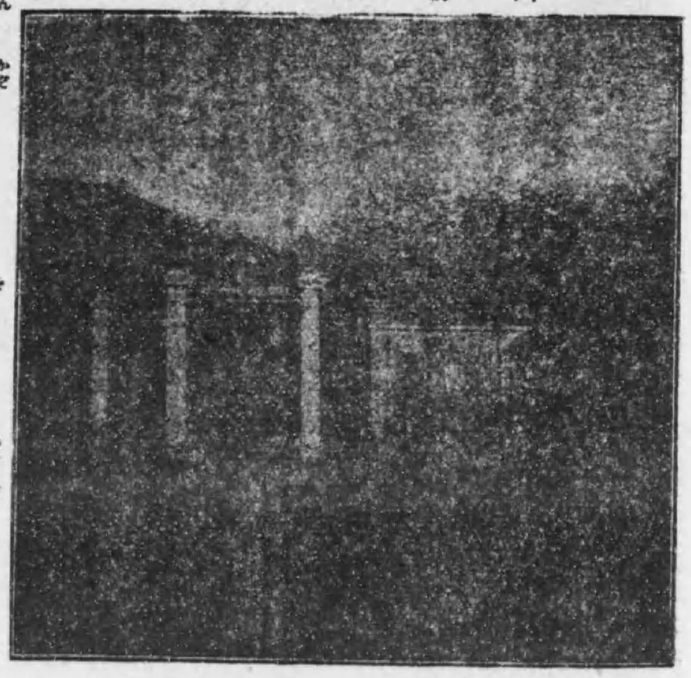
神の化身と仰ぐ、乃木大將を中心として一家を論及した私の罪や重し、冀くば神明佛陀請ふ之を恕し給はらんことを至禱々々

其二 外務省と其運命

(一) 手腕家は死ぬ

對支問題で加藤外務大臣が失敗して日本帝國の面目に傷けたとて、外交問責の國民大會が何國でも開かれた、又帝國議會では外務

外務省正門



大臣に向つて賣國奴だと呼で自ら取消した痴漢もある、外務大臣加藤男が對支問題に失敗したか否かは門外漢の吾等の知るところでない。

然し面白いことには、吾國に帝國議會が開かれてから以來、外務大臣として成功した人は一人もない、陸奥宗光伯が外務大臣として成功の第一人に數へられて居るが、明治二十八年の日清戰役に、遼東半島還附の問題で、國民から燒打事件さへ起つた、小村壽太郎侯が又外交家

今一人の陸奥伯もない

の一人として日本歴史に其名が輝いて居るが此人も亦三十八年役の日露講和には、時の國民から彼是言れて何處でも憤慨の演説もあれば新聞には劇しく反對せられた、日本は陸海軍で成功して外務で零にするとは國民の聲であつた。

此二人は日本の外交家であつたに相違ない然るに二人とも天壽を全ふせずして早く世を去つたは日本外交の爲めに頗る悲しむべきである、然して此二人が世を去つて今一人の陸奥伯を求むることも出來なければ小村侯ほどの手腕あるものもない、外交官に人なしと云ふは頗る適評である。

然して支那問題には無くてならぬ二人があつた、一人は前支那公使の山座圓次郎君と、又前政務局長の阿部氏であつた、然して二人ともに不幸若か死をした、若し此二人があつたら、今回の對支外交

大阪朝日の山座觀

に或は今日の効果よりも、依り以上に成功したかも知れない、大阪朝日新聞が天聲人語の欄に日支問題もへの字に解決して山座公使の一周忌が來た圓次郎地下に胡坐をかき齒を喰ひ絞つておるだらう、公使の死んだのは、一面憤死とも云へる、就任後彼の境遇、彼の憤慨、同情に堪へない、今日此際山座をして在らしめばと思ふこと度々なり、時艱に偉人を憶ふ惜しいかな、山座を煙がつてゐた袁總統は、余の在世中は國難を免るゝも百世の後は知らずと内訓し居れり云云、是を見ても山座の人を知ることが出來る、此二人の死は確かに日本外交の損失である。

斯の如く吾が外務省は手腕のある人は皆不幸にして世を去ることが早い、且つ他省に比較して外務省の人物の劣れることは世の認識するところである、殊に前内閣の牧野伸顕氏が外務大臣と云ふに至

つては如何に外交に人の乏しきかを察することが出來る、新聞が始終一貫して外交の不振を絶叫するも、觀察すれば深き理由がある。

私は外務省が斯の如く何時の時代にも惡評せらるゝには何か理由があるに相違ない、必ず外務省其ものに表象せらるゝに相違ないと觀察して、外務省を研究する氣になつた。

外務省は凶相

(二) 外務省は頗る凶相

私は外務省を一見して先づ其凶相に驚いた、其凶相の最も甚しいのは、地相の艮宮即ち主人位の一隅が德川時代の倉庫に依て包まれて居る、苟も日本の外務省である何故に德川時代の遺物を今頃に保存する必要があるであろうか。

何つも外交問題の時に引出さるゝは山縣公や井上公や松方公等の

外務省艮の

德川時代遺物倉庫

同上巽の

德川時代遺物倉庫

元老である、元老が外交問題に嘴を容れて外務大臣の權力を牽制すると云ふは元老會議の開かるゝ毎に世の噂するところである、果して元老が嘴を容るゝか否かは元より知るところでない、然し外務省の地相に表象せらるゝところから見ると、何物かありて外務大臣を

外交に成功せんとするも不可能

牽制すること云ふことは之を想像し得るのである。

此外務省の主人位に徳川遺物の建物のあると云ふことゝ、元老が外務の主人に向つて干渉するこゝふ噂とは両々相俟つて何物かを語る如くである、元老、封建の遺物頗る面白い對照ではあるまいか。

殊に外務省の巽の活動位の一隅を觀ること最も悲しむべき地相が欠ける居る夫れのみならず、封建時代の建物が是にも一隅を包で居る即ち外務省は最も大切なる外務大臣の權力を表象する艮位と、外國に向つて活動をなすべき巽の二位に大障害がある、如何に外交に成功せんと欲するも其表象ある限りは不可能と思はねばならぬ、假令成効するも社會が之を認識せずして、外務大臣の權威に服從せざるは此一事を以ても斷ずることが出來る。

外務省の敏腕なるものは早く死して其人なきを嘆息せしむるは、

家相が悪いから外交は振はぬ

此地相の活動位の障害を觀ても之を明かに想像することが出來る、活動を本位とする外務省の活動位が欠げるが如きは如何にも外國の侮りを受ける表象の如く想はれて國家の爲めに痛心の至りである。

家相が悪いから外交が振はないと言ふが如きは迷信の甚しきこと言ふて一笑に附するかも知れない、然し軍艦の悪しきは其國の弱きを表象し、軍隊の正しからざるは其國の強からざるを表象するもので運命は必ず形に表象さるゝものである。

日本國の外務省こも言はるゝものが、今現在の如き建物を以て果して外交を代表し得べき力があらうか、私から言へば今の建物は封建の遺物と云ふ有樣である、試に正門に立て、先づ本省を一瞥したならば彼の建物の蕭然として寂しく其勢なきに驚かざるを得ぬ、殊に正門の左右を觀れば、徳川遺物の白壁がイヤに勢を示して、一隅

支那の公使館にすら劣る

に蟠る有様は誠に矛盾したる建物で其運命も亦矛盾を覺ゆるのである。

外務省の建物は何時の時代に建られたるかは知らないが、之を今日に觀れば日本の外務省として其威嚴なきは誰しも認識するところであろふ、試みに外務省と他の大使館とを比較して見たならば、英國や米國の大使館とは元より比較にならない、支那の公使館にすら劣るが如き感じを生ずるのである。

私しは決して外務省を華美にせよとは言はない、立派なものにせよとも言はない、各國に劣らざる程の威嚴ある建物にて、日本を代表して外國に一歩も讓らざる趣の勢強き外務省を得たいのである、此點に於て英國大使館の地相と建物を比較したならば思ひ半に過ぐるだらう。

陸奥伯の銅像は位地が悪い

斯の如く外務省が其表象惡しきに拘らず更に一層の凶相を加へたは如何にも遺憾である、夫は外でもない今度建つた陸奥宗光伯の銅像である、日本外交の功勳者として陸奥伯を紀念するは當然である、伯が各國と對等の條約を締結したは日本史上に滅すべからざる偉勳で之を千古に傳ふるは誠に國家の美事に相違ない、甚だ祝すべきである。

然し何故に外務省の正面に彼の銅像を建たか、之が問題である、正面に佇立して彼の銅像を見ると本省の入口を衝て。門と本省とを中斷して居る。

家相運命上の最も主要なる問題は門と玄關との對向である、住宅は別論として、官衙の如きは門と玄關とは必ず鏡と面の相照すが如く、親しくしなければならぬ、門を正面に搆へる事と否とは工夫を

陸奥宗光伯の銅像は本省と門とを中断した

要する問題なれども現に外務省の如く、本省の正面に門を搆へたる以上、此中間には絶對に中断を許さぬ、陸奥伯の銅像は惜いかな此二大樞要の活機に中断を印した、參謀本部にも、陸軍省にも、海軍省にも銅像はあるが本省の正位を衝いて是を中断したものは一つもない、外務省は何故に斯の如く正面を衝くが如き設計をしたのであらうか。

中断は住宅から言へば家庭の障害で、紛爭を爲すとか、夫妻和せぬとか、甚しきに至つては夫妻、子女と死別を爲して、其親しみを中断せらるゝに至るものである、官衙の如きは家庭はない、然し山座公使の死、阿部氏の暗殺などを想像すると、何だか其中断が適切なるが如くに感ぜらるゝは、獨り私の迷信ではあるまいと思ふ、最も両氏の死は銅像建立以前である、以前なれども斯くなるときには

外務大臣の官舎も悪い

斯くなるべき表象を爲すと云ふことが、既に外務省に障害を爲すべき動機を表象すると断せねばならぬ。

(三) 外務大臣の官舎

外務大臣の官舎は、外務省の屋敷内にあつて、方位上は妻位即ち坤位の一隅に當つて居る、然して官舎の入口が又坤位にあたつて居る、此搆へは外務省の地相上から言ふも頗る凶相で、外務大臣の搆としても又甚だ凶相である。

何故かと云ふと、艮、坤二位は陰陽の起點で、又明暗不分の位地である、此二位は活動も許さゞれば建物も許さぬ、一地相上の自然位として自然の如く樹木を生育せしめて、人と自然とを調和せしむる位地である、人自然を尊び、自然又人を助けて。両々水魚の如

く交るところに、家相の眞意もあれば運命の妙味もある、故に艮、坤の二位は人意の活動を忌みて、自然の豐富を尊び、巽乾の二位は人意の活動を尊び自然の豐富を嫌ふのである、故に艮坤を古來鬼門とか裏鬼門と稱して、之を恐れたのである。

然るに外務省と大臣官舍とは、艮、坤両位の對向で人意上の活動を嫌ふ恐るべき凶相の構である、即ち人意上の活動をなせば、爲すほど問題となる、外務大臣の爲すところと、外交上の活動するところ相背馳して國民の輿論には反し其省務に統一を欠き、ついに各國との交渉憶ふに任せざるに至るのである。

此艮、坤二位の對向は紛擾を表象するもので、之を事實上に求むると、結婚の如きは夫妻の家が此両位にあれば十に七八までは苦情紛爭が生じ離緣になるか寡婦になる、即ち夫が艮位にあり、妻の里

外務當局者よ各國の外務省を點檢せよ

が坤位にありて緣組するときは、大抵は家庭は圓滿にあらずして、其間に破鏡の憂を觀ることが多い、自然上の對向が斯くなるべく表象するのである。

外務大臣の爲すことが其成否に拘らず何時の時代にも、一部のもの煽動によりて國民の問題となり新聞の問題となりて外交の失敗とか外務省の無能とか呼はるゝは此官舍の凶相の表象を觀て如何にも と首肯することが出來る、外交省に就ては論ずる點は澤山あるも幾何に論じても凶相は凶相であるから論ずるは無駄である。

私は外務省當局者が各國外務省の建物を研究せられたらば、外交の發展する國は、外務省も又發展するの表象を示すと云ふ事實を明瞭に覺得し得ると確信す、之を研究して日本の外務省を改築するは現時の急務にして又日本國家の幸福である。

外務省の改築を訴ふ

幸に改築の目的を達し得ば、國民と外務と一致協力するの好機を得て、國光を萬國に發揚するの一代時機到來し、今日の如く國民が外交の不振を喧々するが如き犬猿の紛擾は其後を絶と想ふ。

況んや外務省發達せば自然に敏腕なる外交官を産出して外交益々發展するは事實の歸納より得て私の明かに斷言するところである、日本如何に貧乏なるも一外務省を改築するの資なからん哉、私は切に之を要路の當局者に訴ふ。

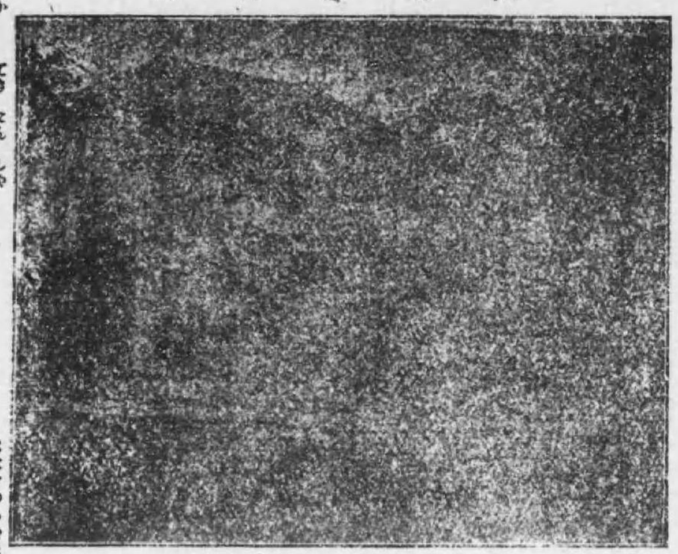
(四) 加藤男の邸宅は如何

官舍は頗る凶相であるが、男爵の邸は凶相ではない、且つ官舍よりは男邸が地相も完全なれば、建物も其當を得て居るから加藤男としては官舍よりも私邸が住み心地が良に相違ない、從つて官舍よりも私邸に宿泊せらるゝことが多かろうと想ふ。

加藤男の宅は麹町區の元園町で外務省との對向は頗る良い、即ち外務省は男の邸からは巽の活動位の正位にあたり、外務省から男の邸は乾の財産位の正當に當つて居る、男は外務で成功する表象の人である。

加藤男邸は凶相ではない

加藤男爵邸



此の對向で觀ると、日本の外務大臣としては現在に於ては加藤男より外に適任者はあるまい、又外務大臣として相當の手腕を振い得るのも恐らく男であらう、若し今回の對支外交が他の人に依つて談判せ

岩崎男邸と同じ構へ

られたならば、今日の日支條約よりも或は劣等であつたかも知れない、方位上から觀察すると斯く斷ぜざるを得ぬ。

男の邸宅は唯玄關から一瞥したのみであるから其詳細は說けないが然し其大躰は之を知ることを得た。

門と玄關との對向は南北の搆へではあるが惡くはない、殊に南北の搆へなるも破衝にはならずして、門より玄關は右に斜に廻つて居るから、門の衝當りは巽の隅の樹木であつて、其搆へは甚だ幽趣である、殊に本館の建物も亦威嚴があつて輕卒なるところは一點もない。

加ふるに四面の高塀には岩崎男家の如く高く樫の木を以て廻して居るから外面から此邸宅を窺ふことが出來ぬ、地相も眼に觀たところでは甚だ正確である、然し參謀本部の圖面に依ると巽が欠けて居りはしないかと云ふ疑がないでもない。

男邸は妻位發達す

地相の妻位たる坤は全部庭園で其快濶なることは、外から一見しても之を想像することが出來る、地相の一番優れて快きは妻位である、聞けば令室は岩崎男の令孃で加藤男の今日あるは妻君が與つて力ありと云ふから、此表象あるは勿論である、現在でも家庭では主人の力よりも妻君の勢力が強いと云ふ、愈妻位の快濶なることを想像することが出來る。

艮の主人位は門の傍らであるが、樹木もあるが自働車の物置の一棟がある、是は甚だ惡い此建物は主人の發展を阻害する表象であるから是非取捨てたいものである、殊に外務大臣と云ふ樞要の地位にある以上は個人の爲めのみならず、國家の上から論ずるも男の健全と活動とを害するものを排除せねばならぬ。

加藤家は財産本位の家

本邸の位地は地相の中心からは西に當つて居る、西洋館と本館とは東西に併びて、本館と土藏と座敷とは一列に南北に構へられて居る、地相から觀れば土藏は乾の位地にある。

此構へは全体を通じて言ふと、財産本位の家で家庭は餘りに女子本位に出來て居る、女子の勢力強くして男子之に伴はぬ姿がある、然れども本館と土藏との位地を觀察すると其財産增進力に強くして基礎の堂々たるは敬服せざるを得ぬ、運命上良相の住宅と斷ずることが出來る。

私は加藤男の邸宅と方位との關係を觀察して將來は知らず、今三年や五年に加藤男を凌ぐ外務大臣を得ることは不可能であると斷言する、誰れが外務大臣となるも社會より無能とか不振とか攻擊せらるゝことを免るゝことを得ぬ、此外交不振の表象ある外務省に卓然

外務省發展せば其省の人も發展す

腕を振ふものは先づ加藤男である。

再び言ふ願くば外務省を改築して、日本帝國を世界の發展國として威力と進取力と威嚴とを表象する、地相に本省を建築して、現在の如く凶相の外務省を廢せんことを祈ざるを得ぬ、居は人を移す、外務省の表象發展せば、其省の人や又發展せざるを得ぬ、外務省に其人を得んと欲せば、徒らに口と筆との議論のみでは得られない、先づ事實に於て其省の活動相を得よと勸告せねばならぬ。

陸奥伯死し、小村侯斃れ、山座又無念に逝く、阿部暗殺の刹那の感如何、國家を憶ふ敏腕家すべて逝く、此一事を言ふも外務省の不祥其物を疑はねばならぬ。

若し外交不振にして國家盛なるを得ば、外務省は下宿屋にても亦可いではないか、日本の外交は一日も之を安心することが出來ぬ、

之を憶ふ毎に心胸の寒きを感ずるは恐く私一人ではあるまい、咄外務の人、何の感かある。

其三　地相上より觀たる大阪市の發達

八百有余年前の地圖、乾の方位に發達せり

地相より大阪を觀察すると運命上頗る趣味ある研究となる。

吾が大阪は日本第二の市街として人戸百萬以上の大都會である。東洋第一の商工地として世界に勇飛するに至つた、其源泉はと言へば、今を隔つる千六百二年前即ち紀元九百七十三年癸酉の仁德帝第一年である、此年仁德帝が難波高津の宮に都を遷し給ふ時に基因するのである。

此圖面は紀元壹千七百五十八年、即ち承德二年に之を圖すことあるから、仁德帝が都を遷し給うてより七百八十五年以後で、大正四年よりは八百十八年以前の地圖である。

此圖は承德年間の現狀を寫したものか、將た其以前の地圖かは其本元を知ることが出來ない、然し八百余年前の圖面で其時代の大阪は斯の如くであつたと証明することは毫も之を疑ふことは出來ないのは勿論である。

此圖面に依りて大阪の地相を觀察するに何れの位地を以て中心とするか之を定めねばならぬ、大阪の基因を爲したるが仁德帝なる以上は、其御皇居を中心とするは當然である、故に仁德帝の皇居の大宮跡を中心として研究せん。

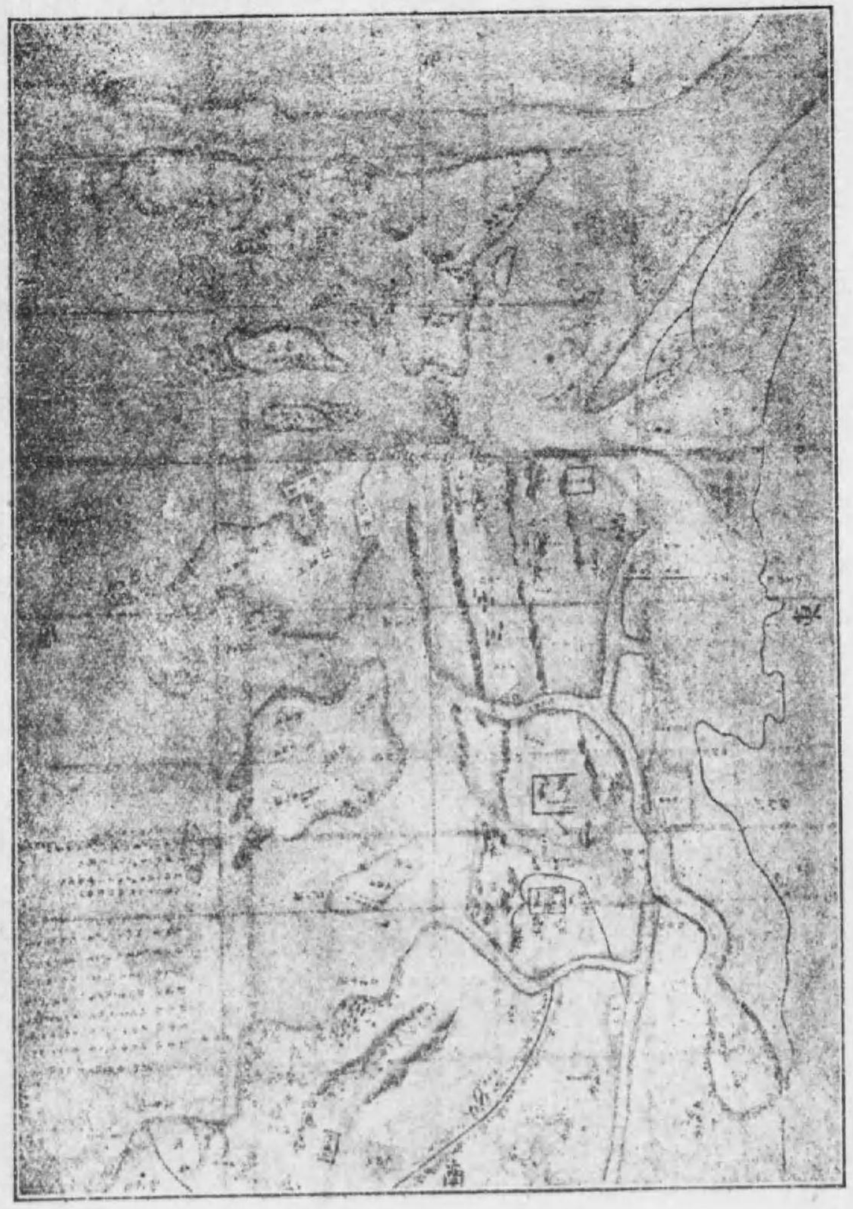
此皇居の位地を中心として方位の活動を觀察するときは、乾は大江浦の海岸より百濟洲一島を包みて、中の島、福島等の孤島も亦乾

こなる、西の位地には新羅洲より、嶋難波の孤島に海を容れて居る坤が古津女浦の一部と、勝間、岸姫松、澤の口、住吉神社を圍で居る、南は四天王寺より、阿部野、東田邊社、萬代池に當り、巽は堀川より百濟郡、住吉郡に接して河内の平原となる、東は岡山、猪鹿居村、澁川郡に接して又河内平原となる、艮は小橋より柏原川を隔てゝ、中道、本庄、中濱、蒲生、今福に延びて居る、北は高津生玉、石山、天王寺跡、野田鼻より渡邊橋、天滿宮、長柄に當つて居る、渡邊橋とあるは今の天神橋の位地である。

之を八百年後の今日から比較すると、一番進んで居るが乾の一方に當れる百濟洲より大江浦、中の島で、現在の船場から中の島が夫である、船場とは東横堀川、西横堀川、南は長堀川、北は土佐堀川を以て圍たる一圓にて大阪の中樞たる今橋、高麗橋、北濱、本町、

八百十八年前の大阪市地圖

江上家所藏　（不許複製）



博勞町等は此船場である、船場が大阪の中樞にして又富の中心なることは現在事實の証明するところである。

此富の中心、大阪の中樞の船場が仁德帝の皇居より乾に發達したと云ふことが運命上の問題で、方位の活動は、乾より巽に發展するか、巽より乾に發展するものにて、大阪市の發達も亦此方位上の活動したるところに發展したるものにて、運命上の証據とすることが出來る。

八百年前の地圖より觀察せば現在の船場は發展すると云ふは中々容易ではない、即ち海を埋めると云ふ大事業がある。

仁德帝の皇居下は海で、夫れより西及び西北に從つて進むほど海となりて進むには困難なる位地にある、之に反して、坤の方位を觀察すると古津女浦より勝間、澤の口、阿部野は陸地にして、阿部野街道すら通じて居る、南は天王寺より東田邊に陸地相接して、之を開拓するに何の困難はない、斯の如く容易なる陸地に發展せずして、困難なる海上に進みしと云ふは、人意の力なれども、自然上斯くなるべき眞理が、自然に發動して人意の發展を促したもので陰陽上方位の活動は此妙味に循環するものである。

八百年當時の丑寅の位地はと言へば、現在と異るところあるは勿論なるも此當時の俤と現在の俤とは共に發表しないと云ふことを証明して居る、之を比較すると乾の船場に發展したるが如き勢は微塵だもない、元來艮位は發達せざるが自然上の本義で、若し發達せば唯一時的にして永遠に發展せないと云ふことは明かに事實の歸納がある。

發達すべき巽が何故に發達せざりしかと云ふに、此圖面にては地

相として巽が高き位地になつて居る、從つて進むべき地の理がない殊に僅かに一里を隔つれば、攝津にあらずして河内國となる、斯の如く巽には進むべき地理上の自然の應援がない、故に巽には一歩も進まずして、乾に發展したのである。

殊に高津の高臺には頗る深き歴史がある、仁德帝は仁德四年に高臺に召して民の疾苦を知り給うて課役を赦し給ふこと三年であつて高臺から民を望下し給ふ慈悲より言ふも、裏面の巽が發達せずして低き正面の乾の發展すると云ふが當然である。

巽から乾に發達するは自然の發達であるから其力は頗る強い從つて衰微すると云ふことがない、然るに若し艮か坤の方面に發達せば其勢は一時であるから假令盛なるも永續するものでない、大阪市が千六百年に基因して今日に至るまで、幾多の歴史を重ぬることに一歩づゝ進み來つて、遂に世界に勇飛する大阪市となりしは、一は仁德帝の明德にして又地相上の理を得たからである。

すべての事物には進むにも退くにも、必ず一の系統が無けばならぬ、系統なくして興廢する理由がない、今大阪の進みしと云ふも千六百年に渉りて一の斷乎たる系統ありて、此系統より進み來つたもので、無意義、無鐵砲に百萬の大都會は出來るものではない。

之を方位上の系統から觀察すると、大阪市の中樞にして又中心たる船場の如き勢ひある土地の產れたは巽に仁德帝の皇居ある所以で而して千六百年前に都を遷し給ふて、尙今日依然として仁德帝の遺跡の盛なるを觀るは又今日の船場あるが爲めである、此仁德帝の皇居と、船場との自然上の系統に斯くならざるを得ざる發達の運命が纏る爲めにして、之を偶然と斷ずることは出來ない。

大阪は船場の大阪にあらずして、大阪の大阪である、然し大阪が大阪たるには必ず中心點が無ければならぬ、發動點が無ければならぬ、其中心、其發動點の發展するところに、他は從つて發展するのである。

仁德帝の皇居の位地と、船場との位地が、自然系統的に發動するに從ふて乾の船場に隣する西も盛になれば、北も盛になるは是れ亦自然にして、西を離れて乾なく、北を離れて乾なき限りは、乾の發達するところに、西、北の發達は當然にして、殊に大阪の如く發展の大なるところは、其隣地の發達するの大なるは又自然の結論である。

船場は大阪の船場なれども、大阪の大を爲すは船場ある所以にして、若し船場を離れて大阪を說くものあらば盲目の象を相するど同樣、其正鵠を失するや當然である。

今日の大阪市地圖を以て、船場を觀察するときは、船場は正に大阪の地相上の中樞にありて四方八隅いづれにも過不足がない即ち北は北區に守られ、東は東區に守られ、西は西區に守られ、南は南區に守られ　四方が四區に包まれて船場は嚴然として其中央にある、從つて船場より大阪全市を觀察するときは、四區いづれか發達し、いづれか衰微すると云ふ偏頗がない、斯の如く秩然として中央と四方とが調和を得て過不足なき市は、日本には無い、大阪が今日の如くに發達し來りしは實に理由ありと言はねばならぬ。

千六百年の光輝ある、大阪は巽の仁德帝の皇居を基因として、船場に發展し、船場發展するに從うて、四方亦發展す、斯の如く發展し來れるは、實に自然方位上の活動し來れるものにて、方位運命上

の妙趣は實に是に存するのである。

其四　道修町の運命と家相

日本唯一の一町一營業の城廓

日本廣しと雖も、吾が大阪の道修町ほど不思議な町はあるまい、全町の中樞は殆んど藥種商の獨專で、他の營業を爲るものは殆んど無い、一町一商業といふ奇現象は、東京は勿論のこと大阪にも、二個所とは無い。

誰でも大阪を知る人に藥種商は何所にあるかと言へば道修町だと答へる、又道修町と言へばハア彼れは藥種屋さんたとドンナ小僧でも推測する。

然して道修町が藥種商に於ける日本の勢力は偉大なもので、東は東京は勿論のこと關東、北海道、至らざるところが無い、西は九州中國、山陰、至らざるこころが無い、即ち日本藥種商の實權は、道修町にありとは、誰しも首肯するこころである、斯の如く道修町が發展したるは、清國の輸入港なる、神戸に近きは勿論であるが、神戸の開港したるは、五十年のことで、道修町の存在するのは遠き其以前である。

斯の如く古來より進んで今日に至るまで道修町が他業者を侵入せしめずして各藥業者が、盛大に其家名を相續し、其業務を發展し來れるは、實に不可思議と言はねばならぬ、新陳代謝は運命の免れざるところ、巍然として一町一營業者の專有たるは、獨り道修町の名

譽にあらずして、眞に大阪の名譽である。

私は道修町を通行するごとに、此不思議の感に打たれないことはない、何れの店も多人數で、多荷物で、然して活動をなす有樣は營業競爭の競爭會を觀るやうで、道修町以外に此一町一營業の活動は觀られないのである。

私は道修町に何か運命上に統一の表象があるに相違ないと、一日閑を得て、戸別調べをした、此戸別調べは、戸々を訪問するのでなくて家の出入口は、何れの方位にあるかと云ふ、タヾ夫れだけである。

家相上最も大切なるものは一家の出入口で、恰も人間の咽喉に於けるが如く、此地位ほど、大切なところはない、此出入口の構造で大抵道修町の統一は觀察し得らるゝと信じて此戸別調べを爲したのである。

東は二丁目の鐘馗商標の樟腦で有名な藤澤商店から始めて、西は高安病院の東の辻で終つた、先づ北側から觀察すると、二丁目が二十五軒で、其内二十軒が皆同一の、向つて右に出入口がある、即ち巽構の家である、内五軒が向つて左の坤構である、五軒には隨分問題がある、同じく三丁目が二十三軒で、内二十一軒が向つて右に出入口の巽構で、内二軒が坤構である。

巽構は方位から仔細に觀察すれば、巽に出入口のあるのは幾軒もない、然し家の四方四角に方位を求むるときは、向つて家の中央より東になれば、巽の出入口で、西になれば坤の出入口となる。

巽は活動位で商業家として是れ程に良い出入口はない、商家の構は此出入口が最上の構へである、道修町が此出入口に統一せらるゝ

は運命上頗る幸運で、今日の賑は決して偶然ではない。

更に南側を觀察すると二丁目が三十一軒ある、其中二十九軒が向つて左に出入口ある、之を艮構と云ふ、然して後二軒が、向つて右に出入口がある、之を乾構と云ふ、三丁目を觀察すると二十四軒である、其中二十三軒が矢張り向て左の出入口で艮構の、殘り一軒が向つて右の出入口の乾構である。

艮構と云ふと頗る惡いやうに思ふ人があるかも知れない、然し艮の出入口の惡いと云ふ塲合は家自體の本位の艮を言ふのでなくて、家自體に對向する塲合を云ふのである、例せば本家の構へに出入口を構へずして例令一尺にても張出すとか、欠けると云ふ塲合には、頗る凶相である、又門が本宅の艮位にあたれば、其出入口の凶相なるや、勿論である、然れども道修町の如く間口の前が直ちに道路な

る塲合は、本宅夫れ自體が艮位となるを以て、二尺なり、三尺なりの壁にて一角を確立すれば、艮構の出入口にて凶相にあらず、乾構へよりは、發展の家となるのである。

何故なれば、乾は財産の本位にして、商業の最も尊重すべき位置だからである。

序ながら一言したいことは、大阪の家で古來より相續して居る家の南側は入口が必ず正面の東で即ち艮構である、住友家の如きは入口は向つて東にある。

此構へは大阪の特有で大家は必ず一致して居る、然るに東京の銀座通りに行くと雜然として一定しない、南傳馬町の南側にある總本家の風月堂も、東京で第一等茶舗の山本も反對の向つて西出入口である、然し室町の山本の海苔屋は向つて東に土間がある。

然し大阪では此出入口は多く船場に多くて上町や九條に行くと、全く方針が無くて無茶苦茶のところがある、是れは近來開けたところで、急いで建築するから大阪にドンナ入口が善いとか悪いとか考へて居られぬ然し住宅や、店を賑かなる市中に建築するには此出入口が第一の注意すべき點であるから一言して置く。

すべて家の構へは、其土地の群衆眞理に依らねばならぬ、大阪には大阪に發展すべき群衆眞理の構へがある、京都に行けば京都には必ず發展すべき土地統一の構がある、私は鑑定に新潟にも出張すれば廣島にも、沼津にも、名古屋にも、靜岡、鳥取至るところに出張して居る、然して、至るところで、富豪の家、良相の家を觀察して其群衆眞理の發展するところを參考として、家を設計する、家を無暗矢鱈に方位の一點に迷信して、家自體の本質と土地の群衆活動の眞理とを觀察せずして設計するは無謀の甚しきである。

道修町二三丁目が合計百十四軒にして、其出入口の異るものが僅に十一軒なるに至つては、如何に道修町が家相上に統一せられたるかを觀察し得るのみならず、道修町が藥種業として、一の群衆眞理あつて、知らず識らず、一町同業者の集合となり、家相も亦其眞理に引轉せられて、知らず識らず、同相の出入口を設計するに至つたのである、即ち道修町の今日あるは、人意の然らしむるところにあらずして、運命上の眞理が斯の如く今日あらしめたるものである。

道修町一丁目に今加藤醫學博士の住で居らるゝ家が道修町の大勢に反對したる建方である、即ち南側で入口が西に搆へてあるから乾入口で、隨分立派な大きな建物であるが、此家が建つと主人が死なれて借家となつた、又確か大阪朝日新聞に加藤博士が人の爲めに差

押られたと書いてあつたが甚だ氣の毒である、家の爲めでもあるまいが、大勢に反對した搆へには住まぬものである。

私は道修町藥種商諸賢に希望す、道修町が藥種商の一業務を以て大阪の中央に一廓を礎きて堂々、日本の天地に發展し、歐米各國、東洋諸國の藥種、工料を擴張して日本に覇者たるは、之れ再び得べからざるの天地にして、諸君の努力は、即ち道修町の努力である、道修町の努力は即ち大阪の努力である。

私の道修町に敬服するのは、猥りに家を改築しない一事である、人は多く虚榮を好み、廣告を好むもので、少しく盛になれば、直ちに其表面を虚榮の搆へとなして、吾は斯く成功せりと言はんばかりの表彰を示すは、現在大阪の改築に吾人の目に觸るゝところである、すべて、新築とか改築は、必ず運命上に其人の變化を來すもので、

容易にすべきものではない、況んや古來より、運命上の統一が發進し來れる道修町の家相は、改築せば、必ず道修町に印せる、群衆心裡の家相に依らねばならぬ、若し個々自由に、堺筋の如き統一なき家相の運命を發現せば、道修町の藥種商は遂に家庭の紊亂となり、他の侵入するところとなりて、衰亡の徴を示すは當然である、私は現在の道修町が、徒らに時流の弊風に迷はず、巍然として現在の如く、堂々發展せんことを冀ふのである、偶々感じて此思想を一言する。

終りに一言したいことは、道修町が今日の如く發展したのは群衆心裡もあれば、家相もあれば又大阪の發展もある、然し第一に尊ばねばならぬは

神農神社の御威力があるからであらうと想ふ、又道修町の藥種業

者が神農様の御祭禮を賑かに、且つ尊嚴に執行せらるゝは大阪人の普く知るところである、大阪に一商業で一信仰の神社のあるのは道修町以外にはありますまい。

神農様の御感應力と云ふと、ヤレ迷信の、ヤレ野蠻のと言ふ人があるかも知れない、之は人間五十年間が六十年と知る痴漢で論外である。

信仰のもとに靈顯が無かつたならば道德も人倫もない、人間と禽獸との差別も無い、信仰のもとに靈顯がありて、道修町は一城廓を堅固に守て、他の侵入を許さないのである。

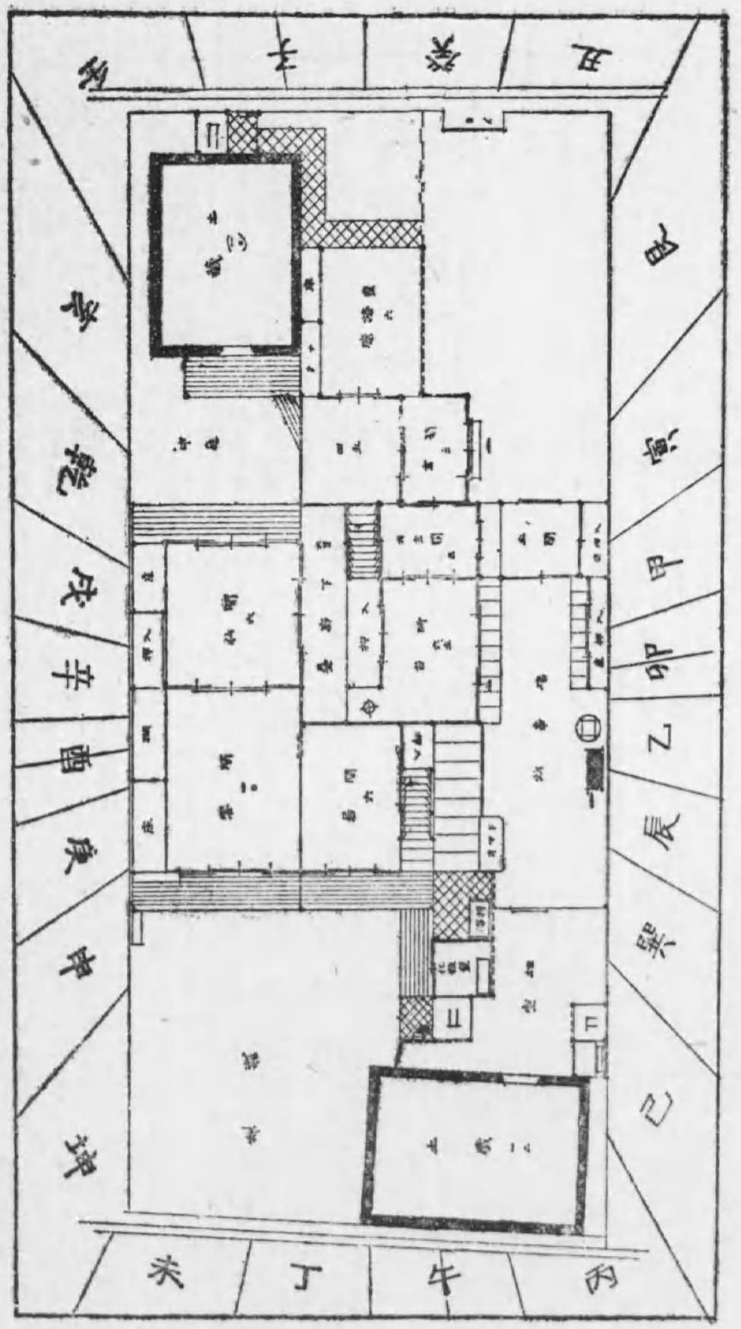
其五　住宅運命の實例

此平面圖はドンナ資格の人の住む住宅か運命上では第一に注意せ

ねばならぬ問題である。如何に住宅の方位や建方が良くても、住む其人と其家とに好配合が得無ければ、人が家に負けて却て恐しき失敗を招くことが實例に澤山ある。

此平面圖は此地相では最早充分の搆へで、始めて建てるには餘りに充分すぎた設計である、從つて此家に住む人は大家の隱居か、財産があつて何も用事が無くて、本宅よりは別宅が安心だと云ふが如き悠々然たる人に適して居る、從つて會社の支配人とか、商店の主人とか活動する人には適當ではない、此搆は活動でなくて守成の搆である。

此家は地相の中心と住宅の中心とが符節を合するが如くで最もよろしい、殊に北に道路があつて、門を北方に搆へて、其玄關を東向きとしたのは苦心を要するところで、此點に於ては此家の衰微する



が如き表象はない、玄關を三疊として廣く虛榮こせず、應接室を本宅と離して獨立せしめたのも又頗るよい、玄關を三疊とし奥の間を十疊として次の間を八疊としたるも、自然の搆で、八卦の五行疊に囚はれては居らぬ。

中央の疊廊下は稍中斷するが如き搆へではあるが一貫して居ないから先づ良いとせねばならぬ、間取に於ては申分はない、家庭に親しき住宅である。

浴室、便所等も、家の正位を衝かず、柔和しく傍らに控へて居るは良い、井戸竈等の位地にも、一點の申分はない、丑寅の主人位と未申の主人位とは両々調和して過不足なきは家庭の團欒を表象して最も良い。

此搆へは光線も良く通し、二階の階段も二ケ所にありて昇降は自

由である。

此敷地は市中にもあれば、又郊外地にもある。間口と奥行の調和にも過不足がない、小兒の澤山ある宅には、運動場もなし、又小兒は二階に住まねばならぬから不自由である。

夫婦と小兒二人位で資産のある人には模範とすべき、大阪流の住宅である。

此土藏の乾と巽の位置を工夫すれば、守成の構を活動の構とすることが出來る。

此土藏の構は餘りに充分すぎて活動がない、即ち巽、乾の二位が滿を表象するのであるから活動に乏しくなる、斯の如く巽、乾の土藏を始めより充分に設計するは運命上の衰運を來す人に多く表はるゝから餘程注意せねばならぬ、此問題が本圖面の主眼である。

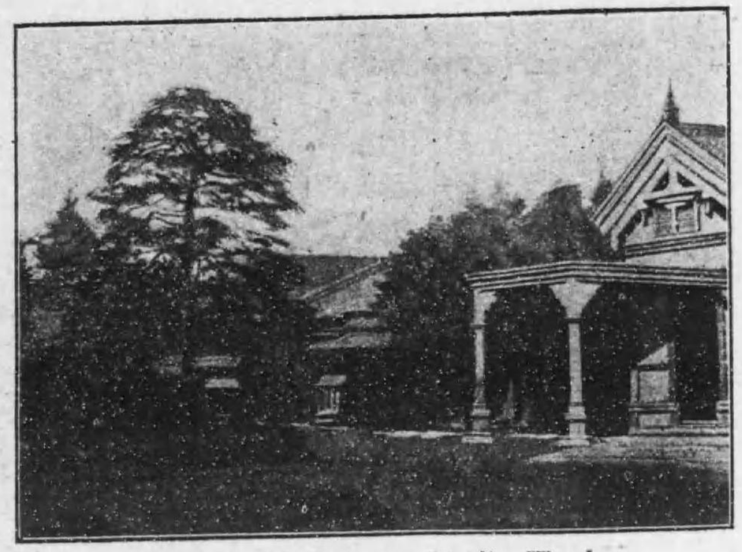
其六　大隈伯の住宅と運命

此機會に於て大隈伯住宅の運命を評論するは頗る趣味あることゝ想ふ。

私が大隈伯邸を訪問したは二度であつたが、昨年五月、確か五日に大浦子の濱職問題で大隈内閣が總辭職した爲め、御前會議となつた當日だと想ふ、大隈伯の自働車が顚覆して大騒動の日であつた。

伯爵の邸は早稲田であることは誰れでも知つて居るが、早稲田大學と誰道路を隔つたのみで、外面からは建物は觀られない構へで、四面樹木鬱蒼として頗る秘密的な威嚴のある屋敷である。

東京では露骨な家の構へと、秘密な家の構へとには頗る運命上の相違があるのは、不思議である、私が岩崎久彌男爵の家を研究した



大隈伯邸の和洋玄關

玄關前より門を望む

いと思ふて外面から觀察したが秘密の屋敷で、表門さへ道路に添ふて居らぬ、四面道路であるが樹木を以て圍で居る、然し乾に土藏のあること、巽に門があつて此両位の對向の妙趣なるには、成程日本一の富豪だと感じた。

山縣公の目白の屋敷を觀察したが之亦絶体秘密の構で、門を入れば直ちに右に廻りて、四面樹木の觀ゆるのみで矢張威嚴のある良い屋敷である、山縣公の秘密主義を明かに表彰して居る。

吾國で岩倉具視公と言へば維新の偉傑で誰でも尊信しない者はない、其岩倉公の家が差押と云ふ悲慘の運命に遭ふた、然して競賣になつた、此家を觀察すると露骨で派手で、一見其構の全体を觀察することが出來る、即ち門が乾の一隅にあつて、起點の丑寅艮宮が大なる長屋建で道路に添ふて居る、門と玄關とが正面の破衝構で其凶

相なるには驚かざるを得ぬ、然して巽が庭園で、未申の隅が一段低き道路に添ふて土藏である、全く凶相の標本である、競賣になるのは當然だ。

早く死だ桂公の家が又露骨で岩倉家の如く裏が傾斜の土地で、入口が未申で、丑寅が一段低くて物置である、此両家が悲慘な運命を生むのは當然で、明かに住宅其物に表象されて居る。

東京で華族や富豪の運命を觀察するに、其住宅さへ一見すれば其運命が那邊にあるか、家庭がドンナ運命にあるかは大抵は觀察し得る、即ち露骨的な虚榮な家は必ず家庭が亂れて居る、是は明かに事實が證明するから不思議である。

大隈邸は伯の平常の言論の如く賑なる構でなくて、實に堅實にして威嚴があつて、一點難ずるところがない、私は邸内を詳細に拜觀

して、伯の運命の堅實なることが其住宅に表象せられて居るに驚いた。

伯の邸は正門より玄關までは凡そ二丁餘もある、寫眞の如く両面は樹木が叢々として其威嚴の構へに、知らず識らず敬意が出る、洋館の玄關と、日本館の玄關と二構へであるが、日本館の玄關は、建方も低く其構も質素で、運命上驕奢とか虚榮とか言へる表象は寸毫もない、洋館の玄關は壯大で建方も高くて威嚴もある、伯の社交的偉人としての玄關としては頗る適切である。

伯の邸宅の建物に二階建が一棟もない、總て平家建であるから、他から一點望むことも出來なければ又望まるゝこともない、山縣公の構も同じく此通りで、住宅運命上としては是程に良い構へはない家庭は秘密を以て尊とし、住宅は威嚴を以て體とする、大隈邸も山

縣邸も此両者は完全に具備して居る世人多くの邸宅は眺望を主として建設して却て他より眺望を自由せらるゝ愚の建物が家庭を害し、運命を害するから恐ろしい。

大隈邸の建物が斯の如く尊嚴であつて、然して最も敬服すべきは土蔵の位地が頗る適切で然して外觀に現はれず他より自由に觀へない構である、建物に調和を得て、大廣間の客室の建物と家庭の建物との調和が充分であるから、秘密の建物と、現はるゝ建物との位置が其當を得て斯の如く良相となつたのである。

伯邸の庭園の廣大なること、森嚴なることは到底筆には記されない、溫室の中を拜觀した時は、夢に外國にでも遊んだやうで、吾等の眼には珍花、珍草が珍聞漢で、唯々不思議なものと驚くのみである、溫室の建方は低く優美にて、其位置が又本邸と、客室の中間に

横に建られて配合も良ければ、又方位上本邸を侵しては居ない傍位にあつて敬服せざるを得ぬ。

伯の邸は地相の中心と住宅の建物とが四方四隅いづれにも偏せずして中央にある安定を得た構へである、其地相と住宅の親しき配合が、運命の禍福を自由するもので、是程に大切なる問題はない、彼の伯邸の壯大なる屋敷に、偉大なる建物が、不偏に中樞を得て、嚴然として四方四隅に泰然たる構へは、東京廣く、住宅多しと雖ども澤山にはあるまい。

此表象に依つて伯の運命を觀察せば伯が巍々堂々として、吾が帝國に勇飛して泰然たる有樣が明かに現はれて居る。

住宅と運命の關係を是等の問題に研究すると、言ひ得ぬ趣味がある、岩崎男家も山縣公邸も、參謀本部の圖面に依りて觀察すると、

地相の中心に建物ありて調和を得て巍然たるところは大隈家と同様の構へである。

大隈邸に最も敬服すべきは邸の樹木鬱叢たる位置に神社を祭りて一日も禮拜を怠たることがないと云ふ尊敬の堂宇がある、一微塵もなき清潔の地で、伯爵の信念の深きと、伯爵邸の高遠とを明かに表象して居る。

伯爵が御即位の御大典に御命に依りて「萬歳」の三聲を獅子吼せられた、此告天の德と名譽とは千古に幾人あるであらうか、五千萬人中唯一人である、伯の邸宅が尊嚴にして、且つ信念に篤く、神社を祭りて、至誠を奉ずるところに、伯の運命は古今を絶し五千萬人を代表する底の發展を表象したのである、私は伯の邸と伯の運命とを觀察して感慨無量に堪へないから此愚言を述べたのである。

其七　早稻田大學と女子大學の運命

早大は進み、女大は退く

(1)　觀察の動機

余が此両大學の運命を觀相する動機は、或人が禪室に來つて、斯く語つた。

私は妹二人まで女子大學に入學せしめたが、一人は中途で死亡し一人は卒業をしたが、良緣がない、尚進で研究すると吾が縣下に女子大學に入學したものが拾幾人ある、すべて良緣が無くて薄命のものが多い、大學に入學せしめた目的は良緣を得て、夫其人を得る爲めである、然るに反對の結果を來すは、女子大學は凶相か又は何等かの原因があるではないか、と

早稲田大學の中心庭

早稲田大學は其人が育つたところで、又斯語つた早大出身の人は頗る活動して日進月歩に人材を得る樣で其成績も隨つて良い、學校も日々盛に擴張せられ發展するは早大の相が良ではあるまいかと。

余は此二問題を提供せられて深く趣味を感じた、感ずると同時に深く研究すべく決心した、余が兩大學を觀相すべく出張したは大正三年の冬と昨春との兩度で兩大學の相の表現するところに其運命の繫がることを徹底するを得て頗る愉快に感じた、先づ早大より語つて見やう。

(ロ) 早稲田大學の運命

先づ地相から觀察して見やう、早稲田の地は東京の中心を宮城に定むるときは乾に當つる居る、日本橋を中心とするも又乾の方位である。

早大の地相は元田園なりしを敷地となしたのであるから全面が平坦で、尠しも高低がない、高低のある屋敷は或る場合には中斷せらるゝことがあるから、餘程注意しないと高低の爲めに凶相となることがある、早稲田大學は此憂は一點もない。

地相の四隅を觀察すると、艮の主人位と、巽の活動位と、乾の財産位には障害はない、唯婦人位の坤位の一方が神社の爲めに欠けて居る、此欠けが巽張りとなりて、門の位地になつて居る。

男子を主腦とする早大の敷地が婦人位が欠けて、活動位の巽が發達して居るは頗る面白き表象とせねばならぬ、若し男子位が欠けて婦人位が發達せばそれこそ大變で校の前途や知るべきである、幸に女子位の欠けたりと云ふ自然上の地位を得たのが運命の何物かを語つて早稲田大學の爲めに頗る幸福とせねばならぬ。

全体坤位は家庭位であるから、一家の住宅として斯の如く妻位に欠ける以上は、頗る凶相で家庭に團欒として幸福なる生活を爲し得ないから、如何なる場合にも此地相は避けねばならぬ、然るに學校の如きは、家庭としては何等の關係がないから、此位地が欠けて活動位の巽の盛なるは誠に面白き表象である、修學して學界に活動するは、學生の面目で、大學の目的も亦是にある、此點に於て、早大の地相は吾が日本の學界に活動することを表象して誠に良相と斷ぜねばならぬ。

不思議なことには、男子位の艮位が、空地になつて其傍に稲荷尊が祭つてある、此構は容易に出來るものではない、余が之を實見した時は思はず愉快に感じた、敷地全体に建物が詰つて居るに拘らず、能く其一隅を斯の如く空地と爲すを得たであろうか、誰人があつて之を指定したであらうか、將た自然に斯くなつたであらうかと空想を畫いた、何れにしても此表象は學校の發達を表象し、學生の男子的たる意義を養成するものにて、誠に祝すべき表象である。

學校又は會社等などが發展の生命とする巽の活動位は如何であるかと云ふに、早大の地相は全く巽と乾とに擴張せられた理想的の地相で、學校の敷地としては模範的である、斯の如く模範的の地相に更に門の地位が、適所に構へられたから、一層、活動的に表象せら

れたのである。

正門の位地を滋石に依りて觀察すると巽の活動位にあつて、然して全校の敷地が殆んど乾の一方に對向して建つて居る先づ正門から講堂、應接室等の一棟を觀ると乾の正當に位地して居る、本部事務所も勿論其方位にある。

門が活動位にあつて、講堂事務所が收獲を得べき財産方位に配置せらるゝは校の盛なるを表象せるものにて、生徒の出入が頻繁で、益々擴張せらるゝは自然の命によるところ寸毫も之を疑ふことを得ぬ。

更に進で早大の中央に巍然として全地相を引締めて威儀堂々たる恩賜紀念館を觀察すると之亦乾の方位に當つて、愈々早大の活動の効果の偉大なるを語つて居る、眞に運命上の觀察に一點の危障がない。

巽の本位にある建物は學生扣所も、文學科の教室である、學生の扣所が活動位の本位にあつて然して全校の建物が乾の一方に擴張せらるゝに至つては其配置の妙なるに驚かざるを得ぬ、設計者に其人ありと云ふべきである。

抑も巽と乾とは、活動を收得の自然上の本位であつて、之を時間に分配すると、巽の方位は午前七時から九時で、一日の活動は將に此時間に依つて生ずるのである。之を時候に説けば晩春、初夏の陽氣最も盛なる時にて、萬物芽を生じ、花を開きて自然の活動に天地を裝飾して、乾坤擧て生氣滿々の好時節である、即ち巽の一方は此陰陽の活動を主宰する位地である。

乾は之を時間に言へば午後の七時から九時で、一時活動して其効

果を收め將に家に歸つて家庭の樂園に晩餐を爲して喜々安眠の境に入らんと欲する人世の快樂期である、之を時候にすれば秋の收獲期で、春の活動に草木實を結んで土藏に收めるといふ、天地收藏の時期である、即ち乾の一方は此陰陽の收藏を主宰する位地である。

之に反して、艮の主人位はと言へば陽の起點にして將に物を生ぜんとする混沌の時期にして、是を時間から言へば午前一時より三時にして、乾坤寂として音なく、萬物眠に容つて、全く自然の境に悠々自適の時である、時より言へば嚴寒將に去つて一陽來往し、卓木土中に生氣を加へて、活動を起さんとする時期にて、萬物は此一歩に始めて春夏秋冬の循環を爲すのである。即ち此位地は自然を主宰して自我を容れず、活動せず、悠々自適するところにある。

坤位は陽の正午すぎて、誠に陰の午後の起らんとする時期で之を時間から言へば午後一時より三時の休息期である、之を時より言へば、晩夏、初秋にして、萬物生育して、自然に休養し生にあらず、熟にあらず、陽移り來つて陰を生じて變化を爲す、即ち陰陽變化の期である、之亦自然の位地にして、活動にあらず、收獲にあらず休養の位地である、故に此陰の起點にして自然の休養を主宰するのである。

斯の如く自然には一の不可思議なる活用あつて、其循環が一地相に表象せられて、自然に背くところは自然に反し、自然に順するところは自然に發達して、其事實が明に地相、家相等の形に証明せらるゝのである。

然して早大は、地相も建物も自然の活用に順じて表象せられ、正門は活動位を主宰し、一切の建物が其活動の收獲位にあつて、偉大

の發達を爲しつゝ教育の効果を國家に貢獻して居るので、早大の良相は獨り早大の幸福のみにあらず、眞に國家の幸福である。

事物は何事に依らず、原因の本に結果を得ねばならぬ、盛なる者には盛なる原因があり、衰へるものは、衰へる原因がある、唯偶然に出でゝ偶然に効果を得るといふが如きは、無妄の甚しきである、今地相、家相に於けるも斯くの如くで、自然に生育する吾人ある以上は自然の法則に原則して、自然と人意と相和順するところに設計して、其効果を得て始めて遺憾なきを期するのである。

早大は此點に於て原因の本に結果を得る自然上順和の構へなりと斷ずることが出來るのである、地相方位に就ては以上の如くであるが、尙他に論ずる點がある。

早大の建物は中斷がない、是が最も良い表象である、中斷と云ふは、或る建物の爲めに地相が中斷せられて二つになるが如き趣きがあるので、之は女大の時に實例して充分に說明するから、今は中斷して居ない說明をしたいと憶ふ。

一地相の建物は必ず建物と建物と調和せねばならぬ、換言せば建物と建物と和合せねばならぬ、恰も一地相の建物は一家族の夫妻、兄弟の如きもので、若し、孤立したり、離散したり、中斷して個々別々となりて統一なき建物の表象を爲すは運命上甚だ不祥の結果を爲すもので、是れは餘程深く注意すべき問題である。

職員に統一がないとか、能く苦情があるとか、職員の病氣又は其他の都合にて、出入が多いとか、教頭に服從せぬとか、生徒が同盟休校をやるとか種々なる問題の生ずる學校は大抵此建物に統一あるか否かを觀察すれば、之を斷ずることが出來る。

今早大を觀るに大なる建物が殆んど貳拾棟もあるに拘らず、能く調和して居る、入り亂れて斯く統一せらるは頗る敬服である、圖面にては感想は薄いが實地に就て、中庭に佇立して全校を一望すると言ふに言はれぬ調和があつて、建物と建物とが極く親しい。

此建物の調和を得た第一の原因は大なる長屋的の建物としない一事である、若し此地相に長屋の如き大棟を建たならば、地相とも背馳し他の建物とも調和を破りて頗る不和合な建形になつたに相違ない、然るに其弊に陷らず、各建物を獨立的に建て其地位を得せしめたから、各自が獨立して或物に統一せられたるが如くで、其威嚴と品位とを持ちて統一せられたるは誠に妙と云ふてよい。

恰も學校の生徒が巍然として獨立的精神を養ひ、學業に忠實に其品性を保ちつゝ、其教頭に服從するや從順にして能く統一せらるゝが如く表象をなすのである、學校の建物として理想的である。

是を空地に觀察するに、出舍張建物も無ければ、又孤立する建物もない、講堂と本部事務所の建物と相親しみ、文學科の教室と學生扣所と相親しみ、然して此両者の建物が正門より咽喉を爲して中庭を望んで居る此中庭の地位が最も良い。

此中庭の位地を錯つて建物と爲すときは、正門の咽喉部を衝きて中斷するが如き趣を爲し、講堂、文科教室の建物と衝突するが如き對向となつて、全體の統一を破ることになる、然るに此咽喉部が快濶なる中庭と爲したる爲め地相に澁滯を生ぜず、透通りたるが如く活動の位地を得て、恩賜紀念館を始め、圖書館、商理科の教室が圍繞して服從するが如く、巽の活動位の咽喉部に進む有樣を爲して居る、此間に衝突の表象も無れば、又孤立するものもない、誠に良く

統一せられて居る。

此統一せられ居る運命上の効果は全校一致の協力強く、教頭、教授生徒、互に和順して教育の爲めに活動するものにて、一點の破壞も無れば、紛爭もない吾が日本に於て得易からざる統一的校舍である。

中庭の傍らに大隈伯の銅像があるが此大隈伯の銅像は最も其位地を得て居る、外務省の陸奥伯の銅像は本省玄關の正面に位地して居る爲め、玄關とも門とも衝突して其表象頗る惡い、然るに今伯の銅像は恩賜紀念館と相正面して然かも地相中央の傍位にありて、中庭に向つて建られたから少しも他を害せざると同時に餘り派手でない若し錯て中庭の眞中にでも建設せられたならば、恰も見世物の如く廣告的虚榮となりて、校舍の威嚴を害すること甚しい、伯其人にも

惡ければ校舍其物にも惡い、中庭の傍らに嚴然たらしめしは、眞に其位地を得たもので校舍と伯と長へに榮へ行く表象と斷ずることが出來る。

要するに早稲田大學は、方位運命上の觀察としては將來益々學界に勇飛する活動的將來あるものとの結論を得るのである。

更に學長高田早苗博士の名に表はれたる運命に就て一言して見やう。

早稲田の早苗、吉野山に櫻花といふが如く、有るものが有るところに有ると云ふは頗る自然で、早稲田に早苗が生育するといふ想像は美的で、意義徹底と云ふことが出來る。

早苗　歸納　昭　倒反　葆

之を歸納すると昭となる、昭とは何と良い歸納ではありませんか

早苗は共に韻鏡外轉二十五開の文字で、早は上聲で齒音清位の第一位にある苗は平聲で脣音清濁の第三位にある。

昭者正韻之遙切音招とある、說文に曰く明也、玉編に光也、廣韻に著也とある、易普卦に曰く君子以て自昭に明德とあり。

昭音招、招はまねくである、潘岳に曰く弱冠忝に嘉招で實校長として最も面白い斯の如き歸納を得る者は少ない、殆んど高田博士の面目を遺憾なく發揮して其人を語り盡して居る。

高田博士

著るこは世に顯るの謂で、淮南子に皆著於明堂とある、卒業生の殊に君子以て明德を昭にすこいふは、

將來まで說盡して居るやうで又文部大臣を表象する樣で斯くも適切なるかと想へば、名は決して忽せにすることは出來ぬ、必ず其人の運命を語つて居る。

早苗こいふ高田博士の二字の名のみに於てすら早大將來の活動が偲ばれて如何にも愉快である、況して地相と云ひ建物と謂ひ、一切が自然的に發達を表象して居るから此自然の活機と、校長博士其人の適材とが兩々相發動して、運命上將來早大の活動は偉大なるものとならねばならぬ。

余は高田博士が學長に就任せられてから學校の成績は層一層の効果を收めつゝ發達したこ斷言する。

倒反は務こなる、務は廣韻に莫卜の切音木こあり類篇には葆也こあり、博雅には茂也こある、武帝樂府に乘雲駕龍鬱何務々

だこある、如何にも文部大臣だ、倒反も亦甚だよろしい、歸納、倒反いづれにか有形の意義あるを以て尊しとする、然るに早苗は倒反に木、茂ると云ふ意義あるは有形で一點申分なき表象である、劃も亦早が六劃にして、苗九劃で韻鏡の富貴高命劃となる。

余は未だ博士の顏を知らぬ、寫眞で觀ると顏面が甚だ長くて、自我的頑性の顴骨が誠に柔かで、中樞の鼻も中庸を得て、高くも無ければ低くも觀へぬ、両耳が大きく豐富で、眼中一點の邪氣がない、綜合して言へば、温厚篤實の人にして、所謂歸納の昭ニ明德ヲ」と云ふ三字が顏面その物を言ひ盡して居る。

（八）女子大學の運命

先づ地相から觀察して見やう。

女子大學の地相は頗る不整理で甚だ傾斜が多い、從つて圖面で說明するも其眞相を穿つことは容易でないと思ふ、其著しき點を擧げると、最も表象の面白くないのがある。

男子位たる艮位の張出しである、早稻田大學は女子位の坤位が欠げて男子位の艮位は欠張がない、自然發達の空地となりて、其發達を表象して居る、然るに女子大學は、反對に男子位が張出して、先づ女子位との對向に大なる障害を來して居る、之れ最も憂ふべき表象と斷ぜねばならぬ。

すべて地相は欠げ張り多く四隅整然たるを以て完全の地相とする然るに艮位の如く活動なく自然の本位にある起點が擴張せられて、他地相よりも一層活動を爲す勢を爲すは、恰も夜中に活動して午朝に安眠すると云ふが如く、不自然の活動にして、其終りを全ふせざ

るや當然の表象である、此艮位張出の地相は地相上最大の凶相たるは殆んど定論と云ふてもよいのである。

殊に此女大の地相は艮位の張るところに、活動の本位の巽位が欠けて、此地相上活動位が一番に不活動を示して居る、此表象は即ち女大の活動に障害あるを說くものにて、之を以て斷ずれば女大が年月と共に意の如く發達すると云ふことは出來ないと想ふ、必ず何等か活動を妨ぐるものありて經營者は頗る苦心の位地にありと言はねばならぬ。

此男子位の艮位の發達は運命上の危險を表象するもので、盛になれば頗る盛になれども衰へるときには又急轉直下するもので、少しも安心することが出來ない、此女大の現狀を觀察すると、女大が斯の如く表象の地相に校舍を建てたのは、即ち其危險を語るものにて

余の推斷にては、女大の全盛を表象せしが既に此地相を撰擇したる時にありしと斷ずることが出來る、換言せば女大は開校當時の勢が其全盛を表象したもので、年と共に其全盛の勢力を繼續することが出來ないものと斷ぜねばならぬ、何故であるかと言へば、地相が艮の原因に發達して、將來活動すべき繼續點の巽位を損じて居るからである、女大經營者の爲めに同情に堪へない苦しい點がある、眞に國家敎育の爲めに此地相は嘆ずべき不祥の地相と斷ぜざるを得ざるは遺憾である。

女子位の坤の一隅は附屬小學校の建物があつて其隅を閉ぢて居る此位は女子本位で、女子大學ある以上は是非とも女子自然發達の空地として保存せねばならぬ建物を以て之を閉ぢて、女子の發達を妨ぐる表象の如き最も不祥とせねばならぬ。

乾の一隅は校長室であつて之は頗る良い構で、校長其人が如何に此校の爲めに盡瘁するかを想像することが出來る、然れども乾の地相は艮位の擴張する爲めに其平均を得ずして、甚だ輕き趣きがある欠けたりと云ふ程にあらねど、艮位に張出す爲めに自然に乾位が狹くなる。

此構へは財政上の豐かならざるを表象するものにて如何に擴張せんとするも、資本之に添はずと云ふ有樣で乾の財産位の寂しき點に之を想像することが出來る。

要するに女大の地相は、財産位に寂しく、活動位に欠點ありて、活動と資産と相應じて艮位の爲めに害せらるゝ地相となつて居る、活動位は生徒の出入を主宰する地位で、學校として是程に大切なる位地はない、生徒發達せば學校發達するは當然で學校としては如何にせば生徒が發達するかと云ふことを學術以外に研究するも亦甚だ大切であろうと想ふ地相、家相徒らに迷信として排斥するは、校その物の運命が地、家両相に表象せらるゝことを知らざる人にて、間接に言へば校に不親切なりと斷言してもよい。

女大と早大とを比格せば地相は全く反對の表象である。

更に進で校舍の建物が如何に運命を表象して居るかを語つて見やう。

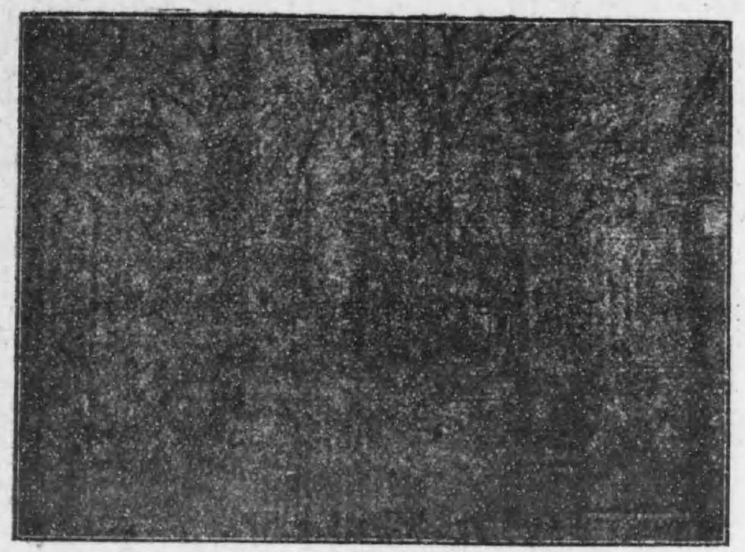
女大の建物は表裏不一致の甚しき表象を呈して居る、先づ門前より一見するに煉瓦造りの偉大なる建物で、門の左りが附屬小學で、右が豐明館の教室で之に併行して大講堂がある。

此三棟が道路に添ふて建られた女子大學の建物中の最大建造物で其豪壯なることは一見驚くほどである、如何にも女子大學たる面目

が躍如として現はれて居る、若し門内に入れば更に如何なる建物があるだろうかと、之を樂で門内に入つた。

門の左りが教室の一棟で木造である、門より正面なる一棟も亦木造で教室の大なる建物である、之に併行して又教室がある。

此教室を境界として地相が一變して、低くなつて居る、之を方位上から説明すると、南が高くて北に低くなる、更に北に進むと日本



女子大學正門

建との寄宿舍が併行して建られてある、其建物が北の道路より見ると甚だ寂しき感想が起る。

之を視察して第一に私の感想に浮だのは、女子大學は、表裏一貫しない建物で、表のみが飛離れた立派な豪壯な建物で、中に進むほど建物が粗末になり、寂しくなりて其調和の不統一なるは誠に驚くほどである、甚だ表勝ちで裏負けのした構である。

之を運命上から論斷すると虚榮の構なりと斷ずることが出來る、虚榮の構へとは表のみが立派で他の之に伴はざるを云ふので、其表象としては、甚だ面白くない。

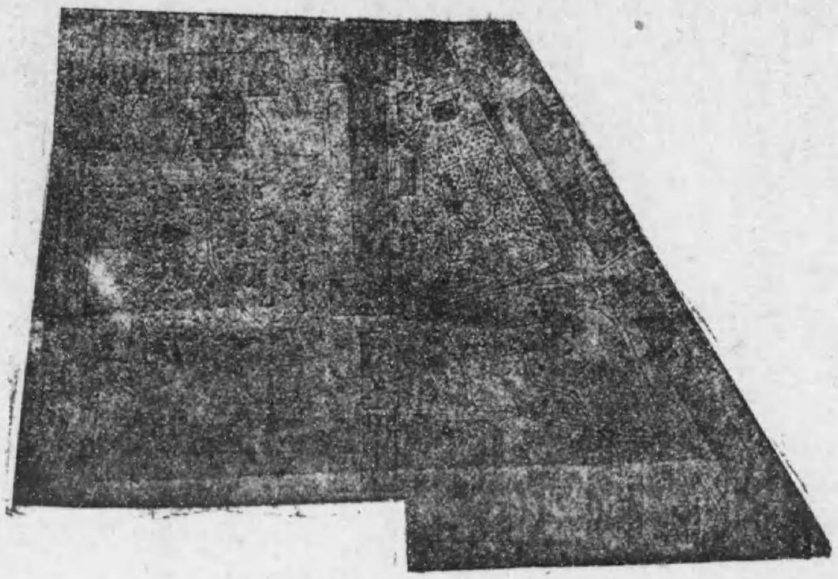
虚榮の構は一面から云ふと廣告的意味を含で居る、其文字の如く實力に伴はざるに虚榮は實力以上の事業を爲さんとする構にて、之は料理店呉服店等の商家に良く表象せられて居る、學校などには甚

だ忌む構方で、殊に女子の如きは虚榮を尊ぶものであるから、其虚榮が學校に表象せらるゝが如きは殊に誡めねばならぬ。

建物の立派なるを虚榮とは決して言はぬ、建物の構その物が位地に依りて、虚榮の構ともなれば、尊嚴の構へともなる、之を例すると早稲田大學の如きは、門の道路に添ふ建物に一の建物らしくが無くて門を入つて進んで始めて、事務室也、恩賜紀念館に接することが出來る。即ち之を尊嚴の構と名附くることが出來る。

學校のみならず、住宅にても門に添ふ表のみが立派なる構にして本邸之に伴はざるときは、其家は必ず滅亡する、運命上の斷案としては、表のみ發達して全地相の之に添はざる構へは、始終を一貫することを得ない表象として頗る之を忌むのである。

殊に女大の構へは、建物が分立對向の構方で、早大の如く和合の



女子大學の地相

表象がない、何故かと云ふと之を圖面に見ると、建物が三對立に構造せられて居る第一が表の煉瓦造の大建物が東西に一の字の如く併行せられて建ち第二も亦地相の中間に東西に長く一の字の如くに建ち、第三も亦斜めに一の字の如く構造せられ、恰も三段に建られた如き趣きがある、例せば軍隊の相對立するが如くで之は衝突の構へで建物全体に會通の趣きがない、殊に地

相の中央の建物は地相を中斷したるが如き趣きがある。

以上を綜合して斷ずるところは女大は地相、家相ともに餘り發達を表象して居ないは、甚だ遺憾とせねばならぬ。

學校の表象が悪いから卒業者に良緣がないか、此問題は頗る牽强附會な說である是れは敎育の事實上の問題で如何に學校の地相や、家相が凶相に表象せらるゝも、卒業生に其運命が伴ふことは言れない。

女子の良緣を得ると否とは學校その物よりも、女子天賦の運命に關係するもので之は全く別問題である、唯注意すべきは女子天賦の運命に依りて早婚に依りて良緣を得るものと、晩婚によりて良緣を得るものとがある。

若し早婚に良緣を得べき運命の人が、女子大學等にありて其好機を失する爲めに遂に良緣を得ないと云ふ結果になることがある、例して云ふと二十歲までに結婚すべき運命のものが廿三歲までも修學して良緣を求めざると云ふは、其天賦の好機を失して一生の不幸を招くことがある、之は頗る注意すべき點で、女大の生徒に斯の如き人がないとは言はれない、從つて學校の凶相が直接卒業者の運命を左右するが如きは斷じて無い。

要するに、地相、家相の表象は學校それ自體の運命を表象するものにて生徒の出入常に頻繁なると否とは、其構造に依りて表象せらるゝは事實上疑ふべからざる結論である。

成瀨校長の名は如何なる運命を表象するか。

仁藏　歸納　穰　倒反　神

仁藏とは仁義を蓄むる義で、仁義を以て大本とする吾國敎育者と

しては良さ表象である、之を歸納すると「穰」となる。

穰は廣韻に禾實豐也とあり、恰も卒業生が其實を結びて豐富に社會に活動するを表象する樣で頗る面白い、又詩ノ周頌に穰者降レ福穰々とある、穰々とは衆也とあるから、是亦衆人に福を降すといふ意義で、教育者としては面白い、詩高頌には豐年穰々とある、又凡そ物豐盛なるを穰と云ふとある、惡い意義は少しもない。

女子大學校長　成瀨仁藏氏

倒反神、是は餘りに表象が勝過ぎて居る、孟子には聖ニシテ而不レ可レ知之ヲ謂フ神ト とあり、又易繫辭には陰陽不レ測レ之ヲ謂フ神ト とある、いづれにしても神の倒反は人間には不相應で、餘り良過ぎて居る。

以上に依りて成瀨其人の感想をすると、學校の校長としては適材適所で一點の申分はない、生徒を豐富に教育する理想と、其精神の潔白とは得易からざる至誠の人で誠に尊敬すべき人と想ふ。

若し此表象に、地、家両相の活動が件ふて一致したらば、女大は今日よりも一層盛大の域に進だと想ふ、如何せん家、地両相が仁藏其人の運命に相反して表象せらるゝは、學校の爲めに痛嘆すべきで今日は是を如何ともすることが出來ない。

余は成瀨校長が神の如き至誠を以て經營せられたるには、陰陽の凶相は必ず廻轉して、將來の發展は期すべきである、即ち仁藏の表象に依つて之を斷言し得るのである。

其八　岩倉公爵家の住宅

(イ)　感　慨

私は絶家の乃木家を悲痛して、又岩倉家の悲慘を語らるゝを得ぬ順序となりました公爵岩倉具張住宅の競賣、噫、是が維新の大偉人大勳位太政大臣岩倉具視公爵の後裔に起らんとは、誠に筆にするさえ憐れであります。

諸君は明治二年九月廿六日に　先帝陛下が岩倉具視公に賜ふたる聖勅を拜讀して如何なる感が起りますか。

汝具視皇道ノ衰ヲ憂ヒ大ニ恢復ノ志ヲ抱ク竟ニ大政復古ノ基業ヲ輔ケ躬ヲ以テ天下ノ重ニ任ジ夙夜勵精規畫圖治以テ中興ノ業ヲ爲ス洵ニ國ノ柱石朕ガ股肱切ニ厥ノ偉勳ヲ嘉ス乃チ賞賜シテ厥ノ

勞ニ酬ユ嗚呼輔道益望ムコトアリ汝具視其懋哉

と明治二年は都を東京に移され給ふた年でありまして徳川幕府が倒れて始めて皇政復古の大光明が全國に輝た時であります。然して皇政復古の偉業は實に岩倉公、大久保公閣下等の至誠に依りて達することを得たので、此勅語を拜讀して、如何に岩倉公の忠誠の無二なりしかを察することが出來ます。

又　畏も先帝陛下は明治十年一月廿四日に

朕西幸ノ間、親シク政ヲ視ルコトヲ得ズ凡百ノ事爾具視ニ委任ス爾具視其レ朕ガ意ヲ體シテ之ヲ處分セヨ若シ夫レ重大ノ件ニ至ツテハ一々之ヲ行在ニ以聞シテ裁ヲ請ヘ事ノ緊急ニシテ稽緩スベカラザルモノハ便宜處決シテ其事由ヲ以聞スベシ

と建國以來大政を委任せらるゝ程の誠忠無二の臣が二人とあつた

でありましようか、殊に明治天皇の御代は吾が建國三千年の間に比すべからざる御偉業の御代であります、此際此時に於て大政を處理せよとの御聖勅を拜する公の如きは誠に建國以來の大忠誠の人と申さねばならぬ、然して公薨ぜられて僅かに三十二年に至らずして、後裔遂に其邸宅を競賣せられた、噫。

岩倉家は村上天皇の皇子中務卿具平親王の後裔ださうでありまして連綿として皇室の藩屏になりて具視公に至つたのであります。

具視公は岩倉家の正嗣ではなくて堀川中納言の第二子で岩倉具慶公の養子となりて岩倉家を相續せられたのであります、明治十六年に公が薨ぜらるゝや岩倉具綱が相續せられ、僅かに一年にして隱居せられ、其後を相續せられたるが前宮内大臣の岩倉具定公であります、公、薨ぜられて今回不幸競賣の憂目に公爵家を嗣子具榮公に讓りて分家せられたる岩倉具張氏であります。

即ち岩倉家は具視公より現代具榮公まで僅かに三十二年にして五人の相續人を異にするといふ事實は運命上頗る注意すべき問題なのであります。

此點に於て岩倉家の家庭は不祥多き家庭なりと斷言し得るのであります、此不祥の家庭が果して住宅に表象せらるゝでしやうか。

（ロ）裏霞町の公爵邸

岩倉家の本邸は麹町區裏霞町で霞ケ關御離宮と道路を隔つのみでありまず、向て右隣が道路を隔てゝ白國公使館で、左隣が東本願寺の前門主大谷光瑩伯の邸宅となつて居ります。

門に磁石を据へて觀察すると門と玄關との對抗は艮の主人位と、

坤の妻位との破衝構へであります、其破衝を避くる爲めに門と玄關との中間に樹木が植へて一見玄關を望むを避ける設備になつて居すまり。此玄關と門の方位上の對向の凶相なるは勿論であります。

地相全體を觀察すると前と向て右の二方が道路でありまして三隅は明かに之を外から觀察することが出來ます。

方位の向は裏霞町の通が辰と戌に當つて、岩倉家は北稍振りて癸の向となりて居ります、早く言へば北向構への住宅となつて居ります、一見したところでは間口が奥行より廣い屋敷の樣に思はれましたが實測をせぬから確とは言はれませぬ。

此方位に依りて四隅を觀察すると岩倉家は其凶相の甚しきに驚かざるを得ぬ、其凶相の最も甚しきが主人位の艮方である。

岩倉家の主人位の一隅は大谷光瑩伯の屋敷に接して前が道路であ

るから直ちに之を觀察することが出來る、即ち門より向つて左に建てられたる長家の大棟が艮即ち主人位の一隅の方位に向つて建築せられて居る、其凶相なるに更に一層其凶相を加へて艮の一隅は一段低くなつて居る、寫眞で見れば黑塗の板塀となつて然して其隅が不潔なる物置の如き建物に依つて建てつめらるゝに至つては主人位の障害の甚しきに寒毛卓立せざるを得ぬのであります凶相といふても是程の凶相は中々少ないと申してよろしい。

岩倉家の家庭が圓滿でなくて具張公が酒池肉林の爲めに蕩盡するに至つた表象は明かに之を認識することが出來る、若し具張公に其行爲なく忠實に事務にあれば恐らく運命に障害を來しないに相違ない何れにしても、公の一身は瀾波を免れないのである。

私が屢々論ずるが如く主人位は方位上の起點にして陰陽活動の源

である、此一隅を誤れば一家の運命が如何に變遷するかは恐れても恐れねばなりませぬ。

更に坤宮の妻位の隅を觀察すると又驚かされた、此隅の地相は道路より六尺以上も高くて然して二階建の建物がありて之に隣して土藏がある、妻君の身上に障害の多き又深く之を察することが出來る。

要するに岩倉家の構造は、家相運命上の根本たる家庭兩位の障害の甚しき家たるは此二點に就て現に証明することが出來る。

此家の構方は俗に逆構と云ふて或時は非常な勢ひを以て進むもので、一代にて萬長者となつた人には良く此構を爲す人があります、會社でも此構に依りて成功したのは澤山にある、尼ケ崎紡績の如き岸和田紡績の如き此逆構へである。

逆構へは艮と坤とに建物を張らして構へるので岩倉家の本家から艮の方位を觀れば長屋納家等を以て建詰られ、坤位を見れば亦建續られて居り之が即ち逆構で、全く乾と巽との反對となるのであります。

更に岩倉家の乾の財産位たる一隅を觀察すると、之は又甚だ寂しき土塀に圍まれたる間の傍の一隅で何等の建物もなく空地となつて小樹木が植へて道路から望むやうに風致を添へて居ります、乾の財産位が寂しき小樹木に依つて空地を爲すが如き財産上の衰滅を表象するもので一家の爲めに頗る險呑なる構へとせねばならぬ、殊に岩倉家の如き大なる屋敷にして、建物密接するにも拘らず獨り財産本位が空寂なる表象を爲すが如きは、競賣の悲慘を觀るも亦止むを得ないのである。

乾の一隅は家の財産を引締めて之を守るを主宰するところで最も大切なる位地であります、如何に家庭が圓滿なるも財産にして衰亡せんか其圓滿なる家庭をも保ち得ざるに至らば、生存競爭場裡の又止むを得ぬことであります、其構へに依りて乾に土藏を建つることの出來ない場合もありますが、乾は財産位だ、即ち一家の財産を主宰する表象と云ふことに深く注意して岩倉家の如きは之を避けねばなりませぬ。

巽の一隅は外から觀ることが出來ないから確かとは申されません、勢ひ庭園とするより外ないところであります、必らず庭園だろうと思ふ、殊に外から鬱蒼たる樹木を望むことが出來るから、巽の庭園たるは疑ひありません。

巽は活動位であつて、陽氣の發する生氣の強いところで、時から言へば初夏で、時間から言へば午前の七時八時と云ふところであります、此位も亦建物の發達と主宰するところで、遊樂を主とする庭園の如きは決して良とは言はれません、然し幸に乾の一隅に本邸の全財産を堅固に引締め守るべき土藏があれば巽は庭園となすも差支はないのであります、然し乾に土藏なきか又は土藏の位置を誤りし場合の巽の庭園は頗る注意せねばなりませぬ。

巽と乾とは活動して財産を得ると云ふ表象で、一は進み、一は守るといふ此両者の對向が完全なる家相上の問題でありまして、此二方は建物に依りて擴張せらるゝを本位とするのであります、故に住宅なり會社などを建築するには此活動と財産の両位を調和するところに頗る苦心を要するのであります。

活動位が空地にて他に比較して發達して廣濶なるときは此家の主

人は頗る豪放の人で、甚だ細心に乏しいものであります、株式か定期米等に手を出す人が若し巽の活動位が廣濶なれば失敗に終るものとせねばなりませぬ、岩倉具張公が誤て足を美人の街に活動して一擲千金の遊興を試みられたるが如きは之を活動位に障害ある表象と察することが出來るのであります。

以上に於て岩倉家の凶相なりし事は証明し得たと思ひます、即ち根本なる家庭両位が凶相で、財産位が空寂で活動位のみが發達して然して誤つた活動の爲めに家庭を破り、財産を蕩盡し、祖先の名譽を汚して終に法律上の處分に、恥を千載に傳ふるが如きに至りしは具張氏先天の運命が、之を憶ふて太政大臣岩倉具視公が地下に察せば涕流の盡くこころを知らず、眞に國家の爲めに痛哭の極であります。

私は岩倉家を根本的に調べて其運命のあるところを論及したいと決心して、更に之を競賣になりました葉山の別邸をも觀察しました。

（八）葉山の別邸は

私が葉山を訪ふたは大正四年の四月上旬でありました、大船驛に乗替へて鎌倉を車上より觀察した時は、如何にも古風の建築で、各家大抵はさんかう樹の生垣で境界をしてある、其優美な構へは一寸他に見ることが出來ない、鎌倉時代の俤が今尚存して居るからであります、然し優美に富で居るが活氣には乏しい、從つて鎌倉は活動の地にあらずして娯樂の地だと云ふ表象である。

すべて其の土地は其の土地の運命を表象するもので、奈良に遊べ

ば奈良の古都であつたと云ふことが、春日の樹木にもあれば、奈良の大佛にもある、京都には平安の式が今尚人性にも持續せられて居る。

私は殆んど全國に出張したが、其土地を觀みれば此土地の盛衰は之を察することが出來る、土地の富だ處は家相もよいが、土地の瘠たところは住宅も悪い、甲府の山奥に行つて其燒山と其凶相に驚き大阪や兵庫縣の土地を瀘車から一見しても其豐富にして良相なることを觀察することが出來る、此趣味を以て旅行せば至るところが實驗の道場で快樂は人知れぬところにある。

私は鎌倉を研究したいと懷ふたれども旅行を迫くから車上其儘で逗子で降りた。

逗子から葉山は全く夏の娯樂地で自然の公園と云ふてよい關西には彼程の土地はあるまい、須磨、舞子は土地が狹くて比格にはなりません。

私は岩倉家の別邸を見て其凶相に又驚いた。

別邸は葉山御用邸と四五丁隔てゝ、有栖川宮御別邸と相并である前が三崎に行く縣道で、岩倉家の屋敷は道路の阪を前にして構へたから屋敷全部は傾斜の地相の悪しきは乃木大將の章に述べたが如く、邸宅として傾斜の地相の悪しきは絶家を表象することであるから是れ程悪い屋敷はない。

屋敷の方位は東向で前の道路が高くて、西は海岸となるから低くなる、即ち東が高くて西に下るやうになる、東は陽で西は陰で方位上からは西や北が高くて、南、東が低きを以て陰陽和順の本義として此地相の凶悪なるは此點にもある。

殊に最も甚しきは艮の主人位の一隅で、之が一番に高くて之を起點として全土が低くなる、從つて主人位が第一の凶相となるは本邸と同じき表象で此別邸も亦家庭不祥の著しき屋敷と申さねばならぬ岩倉家の爲めに實に惜むべきである。

之に對する地相の妻位は平坦でなくて恰も穴の如く觀ゆる趣きがある、其穴の處の坤の一隅を高く土持ちして見晴しよきやうに一寸した亭が建てられて居る、妻位の凶相なるも亦本邸に讓らない。

乾の一隅は甚だ低くして小松が植へてある、然して此一隅のみが欠けてある、財産位の欠けると云ふことは其土地が競賣になつたと云ふ事實は面白い此對照で家相運命上の琴線に觸れた土地と云ふてもよい、私は此に不可思議の感興を催した。

巽の活動位は艮位より道路と下つて來るから艮位よりは甚だ低い

低いが其平坦より觀れば却て高い、即ち道路より屋敷が低いからである、巽の活動位は何の物もなく傾斜して樹木の雜然としてあるのみで、其凶相たるや又勿論である。

要するに岩倉家の別邸は根本的に地相が凶相である、此凶相に如何なる邸宅を建築するも到底良相とすることは出來ない。

門の位地は地相上の巽、即ち活動位にあるから之は最上の構である、門と玄關との對向も亦巽より乾に向て居るから之れ亦最上の構で、門と本邸との對向は寸分の申分はない。

本邸は萱葺で、客間が瓦葺で他に附屬の建物もありて中々大きな構である、其地位は地相の中心からは北より西に廻りて、殆んど乾の位地であるから申分はない。

此表象に依りて觀察すると此別邸が岩倉家に所有せられた當時が

全盛時代で、之を求めて全盛の極を衝たと斷ずることが出來る、何故かと言へば、門と本邸との對照が全盛を表象して居るからである然して此別邸が人手に渡る運命となつたが衰微の險を表象して居る即ち競賣の當時が悲慘の極なるは云ふまでもないのであります、何故に岩倉家は斯の如き凶相に住宅を求めたのであるか。

以上に於て岩倉邸を地相、家相上に於て其凶相の爲めに免るべからざることを詳細に論じたが、更に進で、法律的競賣を受けた、具張氏は如何なる運命の人であろうか、私は具張其人の罪にあらずして運命上斯くなるべき因果だと思ふ塲合もある、少しく其運命を研究して見たいのである。

(ホ) 具張氏夫妻の運命

其家の滅亡せんとする時は必ず滅亡すべき表象のあるもので決して偶然ではない、然して滅亡すべき時に其家に生れたほど悲運の人はない。

具張氏は聞くところに依ると性質は決して痴鈍でも無ければ非常識の人でもない、幼時は甚だ聰明で殊に帝大を出づる頃は秀才であつたと云ふことだ、然して宮内省に奉職中は敏腕で、將來に望を屬せられた人だそうである。

然して夫妻の家庭關係を觀れば明治三十五年に結婚して、三十七年に長男を最初として、大正元年までに六人の子女を擧げて居る、九年間に六人の子女を得ることろより察すれば、夫婦の情は冷血だとは申されない、假令愛情蜜の如くならざりしとするも、夫婦の親情は繫がれるものと想像することが出來る。

然るに突然として一朝花柳の街に足を投ずるに至つて、夫妻の情を忘却し、子女の愛を捨て、祖先の功勳に泥を塗るを何とも思はざりしに至りし此心機一點は頗る不可思議とせねばならぬ。

之を運命上より觀察すれば、一種の動機によりて忽然として、家を滅亡すべき悲慘の運命が花柳の街に爆發したのである。

何を以て之を証するかと言へば、住宅の凶相に於て之を斷言することが出來る、即ち岩倉家の滅亡すべき凶相か主人の放蕩的行爲に發動せられて。凶相と行爲とが共に滅亡すべく一致したからである。

先きにも言へるが如く具張公と雖ども、必ず祖先の功勳を忘るゝが如き白痴ではあるまい、妻子の愛情を思はざる冷血兒ではあるまい、然かも其天眞の情を忘却して。悲慘の運命に囚はれしは。囚はれざるべからざる運命に囚はれたので、之を避け得ざりしが岩倉家の爲めに不幸にして具張氏の爲めに悲しむべき身分を造つたのである。

吾人運命研究の骨目は是にある。

世の中で親を殺す子もあれば、子を殺す親もある、親を殺し子を殺すは悪いと云ふことを知らぬものは一人もない、然かも殺さゞるを得ざりし運命に囚はれたるは、父子先天の運命に斯く爲らざるを得ぬ業感があるからである、然して其業感は必ず、家相に表象せらるゝが、生年月日に表象せらるゝか、人相に表象せらるゝか、必ず外部に露はれねばならぬ、之を研究して避くるが即ち運命の研究である。

今岩倉家の如きも、若し住宅の凶相を避け得たならば具張氏の運

命が、斯る悲惨に陥らざりしは私の明かに斷言するところである。

然し具張氏の運命が住宅の凶相にのみありとは言へない、夫妻の配合が如何なる運命に繋がれて、結婚せられたるか少しく是を點檢して見やう、櫻子は西郷從道侯の娘である。

具張氏　明治十七年七月三日生

妻櫻子　明治十九年一月三十一日生

具張氏　年戊寅　城頭土性　本命五黃土星　月戊午

火性七赤金星　日壬午木性九紫火星　空亡申酉

櫻子　年乙酉井泉水性本命七赤金性　月己丑

火性六白金性　日辛卯木性　一白水星　空亡午未

右の生年月日に依ると愈以て具張氏は岩倉家を衰亡せしむるの運命で、本來から言へば岩倉家を嗣ぐ資格のない人である。

即ち此の生日壬午を本體として、月の父母の干を觀察すると戊で祖先の命を觀ると又戊である、即ち壬は水性で戊は土性である、土尅水となりて、祖先からも、父母からも尅されて居る。

此の尅せらるゝといふことは、運命上の和親と相續なき意味で即ち絶緣と云ふものである水生木と言へば水から木を生ずるから和親と相續ありて父子親しきも、土尅水となり、具張氏は祖先からも、父母からも絶緣せらるゝ運命となる。

斯の如く具張氏が長男嗣子として岩倉家に生れて其本命が祖先と父母と絶緣するといふ運命の日に孤々の聲を擧げたるは、出産の當躰既に岩倉家の衰亡を表象するものにて、今日の悲惨なる原因は此分娩の刹那に於て芽を萠したりと言はねばならぬ。

一家の運命に何が凶惡だといふても、嗣子其人を得ないほど凶惡

はない、即ち嗣子が其家と運命を同ふせず、其父母と相反するが如き表象の日に生れたものは一家は必ず不祥で、衰亡するか、父子相爭ふか破産するかを免れない、

成功するには成功すべき原因ありて、其原因を助長して成功するもので、一家將に盛ならんとするときには必ず其表象が其子女に現はるゝものである、從つて嗣子其人が祖先を助け、父母を助くべきに此日に、呱々の聲を擧げたならば、一家の幸福なる運命を助長する者に、之れで一家の幸福はない。

故に一家の運命を知らんとするには、先づ其嗣子の祖先と父母とに如何なる關係あるかを研究するが第一である、岩倉家の如く嗣子其人が祖先と父母に絶縁するが如き表象に出でしは眞に悲しむべきである。

更に妻君の運命を觀察すると、此性の人は夫緣の薄命な人で婦人としては最も厭ふべき表象の日に生れて居る、何故かと云ふに生日が辛卯の日で之が自分の本命である、然して夫との緣を見ると月が己丑である、又祖先を觀ると乙酉である、すべて妻を本位として結婚を觀察するには支を以て本義とせねばならぬ、之に依ると生月日卯は木性で夫緣は丑である、丑は土である、木尅土となりて性來夫を尅して、夫妻の間は親和を缺ぐが此もめの表象である、本來より言へば養子を貰ふ命と云ふてよい。

其性質は温順で夫に盡すことも忠實で夫人としては申分はない、然れども夫妻の配合を誤つて居るは頗る遺憾である、殊に午と未の空亡であるに、夫具張氏が午の月の午の日に生れて、妻より空亡せられて居る、具張氏よりは妻の生年酉を空亡して、夫妻ともに空亡

の衝突がある、是れでは夫妻間に順境の運命を求むるは不可能で夫妻が波瀾の運命に漂ふは是非なき次第とせねばならぬ。此夫妻は結婚を誤つたと斷言することが出來る。

更に進で具張氏の姓名に如何なる運命が伏在して居るかを觀察して見やう、序に一言することがあります。

私の姓名と運命に關する研究は現在流行しつゝある撰名法とは全く其根本を異にして居る、私は孟子の盡心篇に諱レ名不レ諱レ姓、姓所同レ也、名所獨レ也とあるが如く今の姓名の法を取らない、殊に日本の御帝室には御姓がない、又婦人に姓を冠するも未婚のものを如何にする、養子に行く男子は如何、要するに名の運命は其命名と云ふ表象が主因となるので、撰定せざる姓に運命の伴ふ理由がない從つて私は今の姓名の法を取らぬ。

名は其人の名である、從つて其人の本命たる生年月日の五行と相應して命名せねばならぬ、即ち名が生年月の運命を助け生年月日の運命か又名を助けて幸福なる運命を發達するところに命名の本義はある、然るに現今の如く、其人の本命を無視して唯字劃、意義、天地、乾坤、五氣等の配合にのみ依るが如きは無責任の甚だしきである、現に流行せらるゝある撰名法は虚僞の最も甚しきことは余の拙著に論じで居る。

偖具張の名を韻鏡に依りて觀察すると頗る趣味ある研究となる。

具張

具は内轉十二合牙音去聲濁音　燿の子字

張は内轉三十一開舌音平聲三位清音　張

具張を歸納すると「强」となる强は三十一開の牙音平聲濁音第三位

にある然して同位に「彊」と「弶」と「噓」との三字がある。

強は廣韻に剛強也又健也とあり又廣韻に暴也ともある集韻には勝也ともありて、氣力の強きを意味して居る、之に依つて觀ると具張氏の剛情性を察することが出來る、他人の忠告が馬耳東風なればこそ一藝妓に指輪壹個に五萬圓をも投ずることが出來る、殊に強の應援がでる、強は說文に迫也、廣韻に迫者勉力也とありて手強き助けを爲す、「弶」は玉篇に施罟於道也とありて禽獸を取る器である「噓」は說文に大笑也とあり書經に數過友家飲噱すとある。

此歸納に依つて具張氏を評すると剛性な點と、飲酒大笑して豪傑氣取るところは確に窺ふことの出來るは不思議である。

倒反すると「駐」となる駐は內轉十二合の舌音去聲淸音の三位の健にある、然して同位に「株」と「柱」と「怵」との三字がある。

駐は說文に馬立也又馬止也とありて車馬停止と云ふのである、即ち行止る義である、柱は支也とあり、株は雜名に誅也如株木根枝葉盡落也とあり、駐は玉篇に憂心也とあり集韻には心駐然起也なり又怖也ともある。

倒反に依つて運命を觀察すると、剛性の大志も酒池肉林の大笑も唯一時の夢で之を貫徹することを得ず他に支られて中途に止りて恰も枝葉盡落の有樣で妻子別離して恐怖の境に憂ふるの表象である。

如何にも具張其人の運命が其名に物語らるゝ樣である尙五行の關係を觀察すると。

具は八劃の木性で、張は十一劃の火性である、然して生年が土性で、生月が木性であるから、木生火、火生土となりて之は惡しくはない從つて身體は健全であらう。

劃は十九劃で壽命には良いが他の關係には頗るよろしくない。
要するに五行と劃とは健康と壽とに於て申分ない表象である。
妻君の運命を觀察すると左の如くである。
櫻子と戸籍謄本にあるから此二字から歸納した、子女の子は通稱であるが、櫻子夫人のは本名となつて居る。

櫻　子

櫻は外轉第三十三開喉音平聲清音第四位、嬰と同音（集韻四櫻は伊盈之切音嬰）
子は內轉第八開齒音上聲清音第四位
櫻子を歸納すると「譆」となる譆は八開の喉音上聲清音の第三位にある、然して他の三聲同位に「醫」と「擅」と「一」とある此內二聲は通韻である。

譆は玉篇曰不平之聲也恨辭也、類篇曰忿也傷也とあり又痛聲也とあり、此歸納に依ると櫻子夫人の運命は氣の毒ながら命名の刹那に今日の境遇あることを表象して居る、恨辭、痛聲、之れ何等の表象ぞ、夫が花柳の街に一擲千金の豪遊を爲す、誰か恨辭なからん、然して恨辭が痛聲となりて、其の意中の忿に堪へないのは眞に同情の至りと申さねばならぬ。

醫は病を治する醫者で、「擅」は敬禮を云ふので　說文擧手下手也とあり、「一」は別段に意味はない。

櫻子を倒反すると「精」となる、然して同位に「井」と「精」と「積」との三字がある、此倒反は頗る良い、精は說文擇也、廣韻熟也、細也、專一也とある、又明也、巧也、鑿也などありて、意義として一點の申分はない、即ち倒反は甚だ完全である。

運命上、歸納と倒反とは輕重することは出來ない斯の如く歸納が悲痛で、倒反が精明なるは其人の運命に波瀾あるを表象するもので或時は精明の快樂を盡して人をして羨望せしめた時代もあり又一變して痛恨を閨房で忍ぶこともある、要するに櫻子は波瀾の運命を表象したる名である。

櫻は廿一劃で子は三劃で廿四劃となる、韻鏡要決に依ると遭難病弱劃となる是は甚だ惡い。

櫻は喉音土性で子は齒音金性である、生年が水性で生月が木性であるから、土尅水、金尅木である、然し土生金、金生水、水生木の會通もあるから、先づ普通である悲痛さへ無ければ先づ健康の五行配合である。

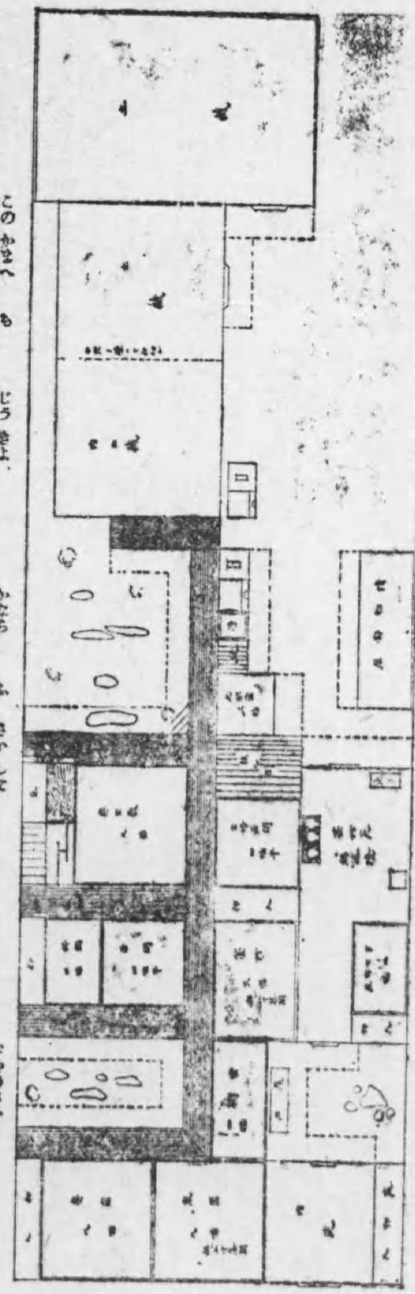
以上に於て余は岩倉家を論じたり、余の之を說く眞に吾が國家の

爲めに悲慘なる歷史を後世に語りて、國家の柱石たる、岩倉具視大勳位公をして地下に其名を恥かしむるからである、世の人よ、運命は吾人の生命なり、若し運命なければ人生何ぞ、喜怒哀樂のあるべき、余は唯言ふ、地相の表象にも運命あり、邸宅の表象にも運命あり、夫妻の表象最も亦恐ろしき運命なり、是を事實に証明せんが爲めに愚說を述べたのである。

其九　住宅運命設計實例

此圖面は大阪の或家相家が越後新潟の淺田氏に設計したのでありますが、更に私の處に鑑定に來て、遂に此設計を止たのであります此圖面には方位が記してないが事實は巽向であるから、地相は頗る宜しい。

此圖面に就ての凶相は全く家自體の問題でありまして、此家は住宅とすべき資格のない家であります、即ち家庭團欒の表象が些しも無くて、間取と間取とが中斷して、全く料理屋か、旅宿屋の構であります。此構に若し住居せば、必ず夫妻親しからずして病災となる心、子女に死別するか、左も無くば子女が無くて誠に家庭に寂しき表象の家であります。



此建方は店と、本宅との二棟であつて、中間に玄關があります、此構へは店と住宅と對向の構へには最上であつて、大阪の船場の中心の大商店は皆な此店と住宅との二棟になつて居ります、此構へは町家の商店としては一點の申分はありませぬ。

然るに玄關を入つて住宅に入ると、板椽を以て本邸の中央を両斷して之を貫いて居ります、此家庭中間を表象せる恐ろしき建方には驚かずには居られませぬ、剩さへ間と間との間が又板椽となりて中斷して居ります、更に勝手の一方を見ると又押入を以て両間を中斷して居ります即ち本邸に五間あつて、五間ともに中斷せられて、個個獨立して居ります。

私は此構へを囚人の構へ、病院構へと申して居りますが、病人などあつて一人づゝ養生するには頗るよろしい、又間の構へが一間ご

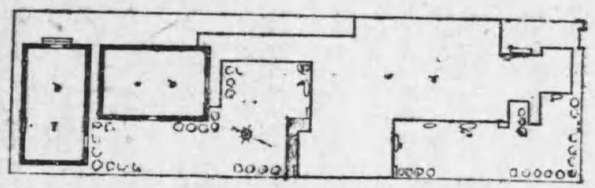
こに中斷せられて居るから圖面で見ると隔離室の如く見ます、又事實斯の如き家に入ると、少しも親しき關係がありませんから、旅宿にでも泊つたような氣がして、頗る陰氣であります、斯の如き離間、中斷の住宅を設計するのは、家自體の本能を知らず、徒らに空氣とか、便利とか、又方位に囚はれて斯の如き設計に陷るのであります。

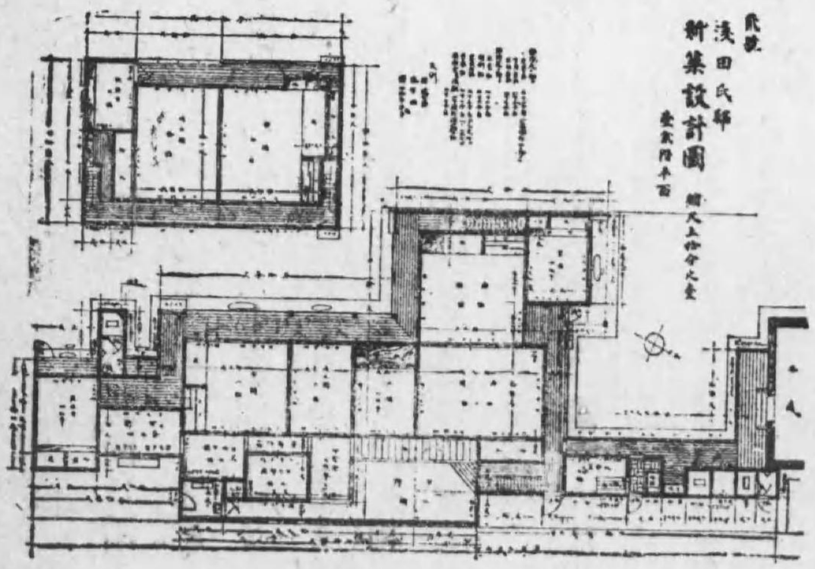
すべて住宅は、孤立間、隔離間又中斷構を厭ふものでありまして私が事實に之を實驗して寒毛卓立する程に恐るゝのであります、住宅は自體が必ず家庭の親しく團欒するが如く、間取が各自に親しく無ければなりません、時折りに來る客を目的として設計したり、又病人のあるときに一間づゝ離れて居ると便利が良いなどゝ、病人の無い時から病人を感想して、住宅を設計するが如きは沙汰の限りであります。

すべて住宅の設計には床の間を主人と假定して、此間に添ふて夫人の室を取り、更に子女の間、下女の間と云ふが如く、家庭に親しきが如く、間取を親しくして設計すれば、住む家庭と家相とが両々調和して、其住心地の良いのは、事實が明かに證明いたします。

すべて住宅でも會社でも、建物の自體が一番大切で、家相とは家自體を指すのであります、此家その物の自體が完全に位置し、具備して然して土藏や門其他の附屬物を調和して、始めて方位その物を應用して家相と方位とを一致せしめて其家が發達、健全の住宅となるのであります。

配置圖





私は此淺野氏の製圖を托せられて、根本的に改めて、第一圖の如く配地圖を主として、第二の製圖を爲したのであります。

淺野氏は始めは店と本邸との兩棟より設計の希望でありましたが今直ちに店は必要でない、何時必要の時期が來るかは知れないから先づ本邸を最初に建築して、後日必要の折に店の構造を爲す範圍を余地として設計するこの希望でありました、從つて本設計は店を建築する地が、本邸の南が庭園となりて、表は塀の構へとなつたのであります。

此地相は巽と乾との方位對向でありますから、門より玄關に進み玄關より本邸を中心として、離座敷土藏に至るまで其對向が、巽より乾に發達して居りますから、全体が活動位より、財産位に發達して居ります、地相の良相なる爲めに、建物其物が自ら良相となりて

住宅地相上の最良なる設計を爲し得るのであります。

是を先きに設計したる、或家相家の設計と對向すると庭園に餘裕があり、空氣と光線とに充分の配置がありますから、健康上にも毎日の住居にも、頗る便利であります、前設計の如く、家を中斷する通路の椽と、間を中斷する椽が餘りに甚しく大きな爲め、庭園を取るを得ず、光線と空氣の流通が惡しき爲め、全く不健康の構となりて、甚しき凶相となつたのであります。

家相中に何が一番凶相かと言へば、此中斷の構と、間毎に椽を以て切斷する如きは、絶家命の運命を表象するもので是れより凶相はありません、設計製圖に苦心するは、要するに、地相と邸宅と間取と、門と中心と土藏と、空氣と光線とに調和を得んとするから最も苦心するのであります、此淺野氏の設計も亦十五枚の製圖と一切の

見積書を詳細に認めて、武田氏と同樣なる設計を托せられたのであります。

其十　結論

余は以上に於て本論を論及したり、然して本論の主義は第一の着眼が住宅と意思である、住宅には商人もあれば、官吏もあり、料理屋もあれば、又少き借家もある、其人と其運命とに依りて其住宅を異にするは事實上の示すところで、其人の意思の表現するところに從つて其住宅と運命が異ならねばならぬ、其人と其運命とに何等の差別を爲さずして、唯方位と間取にのみ着眼するが如きは誤れるのは甚しきである、從來の家相鑑定者は全く唯方位と間取にのみ着眼して地相と住宅の中心關係などは夢にも知らない、故に住宅と常識

の關係の如きは其何事なるやさへ解し得ないのである。

余は唯一個人の運命を主とするにあらずして、國家的に之を觀察するが趣意である、乃木家、岩倉家、外務省を論ずるが如きは、實に住宅と運命の恐るべき表象を示して、國家的に反省を促すの目的からである、以て之を本論の結題に一言するのである。

住宅運命大觀 終

大正十四年十一月一日印刷
大正十四年十一月五日發行

不許複製

住宅運命大鑑

著者 大阪市南區松屋町四番地 田中菊次郎
編輯兼發行者 大阪市南區松屋町四番地 宗像石萍
印刷者 大阪市南區松屋町四番地 鳴田良治
印刷所 大阪市南區松屋町四番地 法令印刷工場

定價一圓五拾錢

發行所 大阪市南區松屋町三九番地 神靈館
大阪市南區松屋町末吉橋北へ入 榎本法令館
振替大阪三四八二番 電話東(一一六二四)(一一七九五)番
發賣所 東京市神田區佐久間町一丁目三番地 榎本法令館東京支店
振替東京七二七九三番 電話淺草四七一七番

終